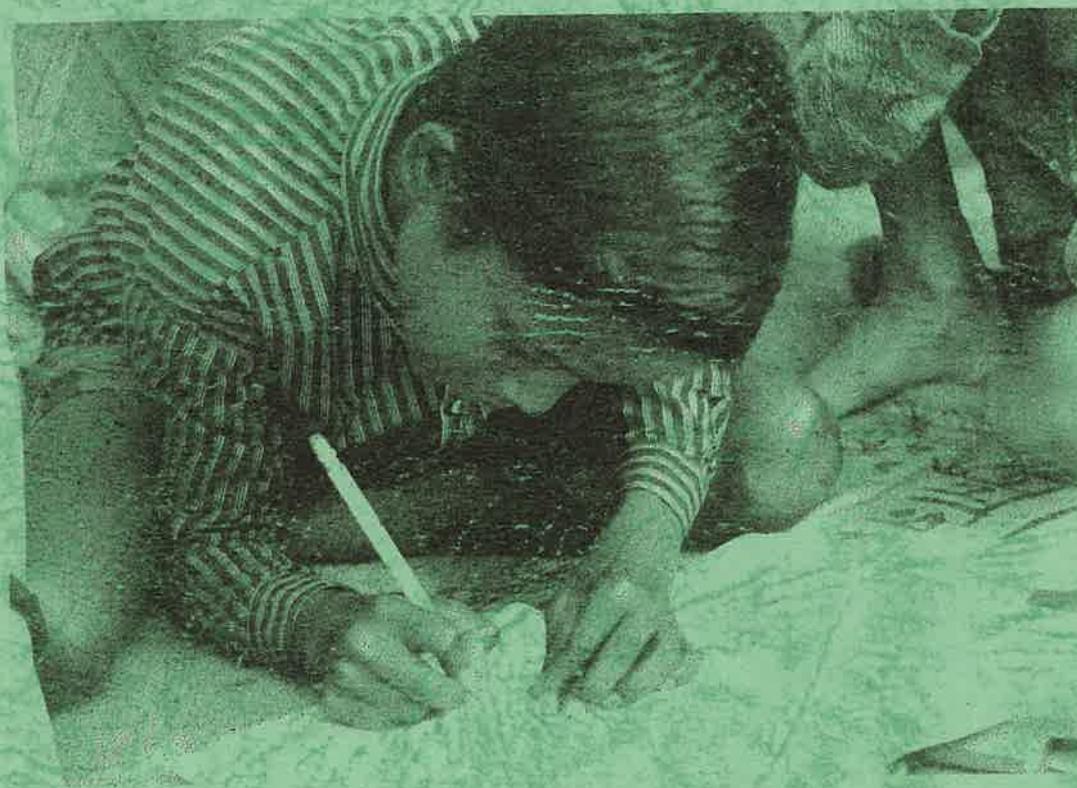


第18回 (2000年冬期)

バングラデシュ 寺子屋訪問ツアー報告書



アジアキリスト教教育基金

〒169 東京都新宿区西早稲田2-3-18-26
TEL. & FAX. 03-3208-1925



エイセフ The Asia Christian Education Fund

目次

	page
1 巻頭にあたって	1
2 ツアー日程表	4
3 礼拝日程表	5
4 地図 (バングラデシュ全土、ジャマルプール)	6
5 ベンガル旅行記	8
6 歌集	30
7 感想文集	34
8 集合写真	52
9 参加者名簿	53
10 編集後記	53

巻頭にあたって

ACEF・BDPとは

バングラデシュの子どもたちに「寺子屋を贈ろう」と、1990年10月に発足した「アジアキリスト教教育基金」(略称ACEF)は、バングラデシュの首都ダカで幼児・初等教育に取り組んでいるキリスト教系のNGO(民間公益団体)の「サンフラワー教育計画」(Sunflower Education Program、略称SEP、責任者ニト・マラール女史)からの呼びかけに応じて、それに協力するために設立された。

識字率も低く特に女子に対する教育が軽視されたことからバングラデシュ、例えば農村はと貧しい地域において女子は、ロバを引くために14~15才で結婚させられ、それの人は層加の一因ともなっています。

そこでSEPは、貧しいために勉学の困難な女子の中学と高校生を選んで「寺子屋」教師と奨学金を支え、一方、識字前の子どもたちに15~20名を集めてクラスとして「寺子屋」教育を始めた。子どもたちに生活指導を含めて「読み、書き、計算」などの基礎知識を学ばせるのです。小学校のない地域では、小学校の設立が進められている。と同時に、集まってくる母親のためにも、生活字級、保健衛生、識字教育を実施してきました。

「寺子屋」の1学級(教師1名と生徒20名)に要する経費は年間約5万円です。SEPは、ダカ郊外のジエライン地区に10校を開校することからスタートしましたが、ACEFの協力開始により15校となりました。その後も着実に発展しつづけ、政府の認可を受けるに十分なほど規模も実績も整ったということから、発足から10年経過した1999年には、以前の「ワールド・コンサーン」という団体との契約もとの作動に終了符をうら、バングラデシュ政府にNGOとしての認可申請を行い、正式に認可を受けるに至っています。この新たは出発に際し、SEPは、名称をBDP(Basic Development Partners)に変更しました。B=Basicは、教育をはじめ開発・発展の基礎となるものを求め、D=Developmentは初等教育を中心にとらえつづも、将来その周辺にある課題にも配慮を加えてゆきたいとの願い、P=Partnersは、住民とのパートナーシップ(共に働く)を表しています。

現在、資料1にあてはるに、8589名の子どもたちがBDPのもとで学んでいます。学校数も44校、先生数も206名にはりました。識字率も26%から38%へと確実に上がっており、

今回のスタディー・ツアーでは、去年新たに試みで設立されたばかりの職業訓練学校を訪れる機会がありました。人びと表情の子どもたちが、技術修習のために懸命に働いていた姿が印象的であり、また、少数民族であるガロ族の農村地域に新しく建てた寺子屋では、ガロ族の子どもたちとベンガル人の子どもたちとが仲良く1つ屋根の下、学んでいます。これら寺子屋は、いずれも地域密着型の学校、として成長しているように見受けられました。BDPと住民とのとても良い関係を築き上げていることが肌で感じられたので、各地域で、それぞれの生活に合った学校の建てられ運営されているので、寺子屋設立が村おこしのきっかけとなり、いま例も見られました。これからの、より多くの地域に寺子屋の建て、より多くの子どもたちに教育を受ける機会が与えられることを心から願います。

以下、スタディー・ツアーの際、現BDP総責任者(あまアムバート氏)により用意された資料を掲載致します。

BDP at a glance, FY- 2000

* Name of the working areas— Mirpur (Dhaka), Puball (Gazipur), Gopalpur (Jamalpur), Khathira (Barisal).

* Program components:

Feeder

Non-formal Primary education (NFPE)

Post Primary Assistant Program (PPAP)

Vocational Education Program (VEP)

1) Sewing 2) Welding 3) Carpentry 4) Electrical

Primary Health care (Preventive and Curative).

- No. of districts – 4
- No of police station – 8
- No of Union — 22
- No of Village — 92
- No of School — 44
- No of Teacher — 206
- Total no of graduates passed out from BDP school over the 5 years — 1757
(1995—124, 1996—293, 1997—384, 1998—431, 1999—525).
- No of area organizer—4
- No of school supervisor—14
- No of vocational School – 3
- No of Vocational teacher – 4
- No of Vocational student— 78
- No of post primary assistant student— 144
- No of staff— 35
- Total no of Beneficiaries — 8589

2
料
資

District wise breakdown of the beneficiaries of Feeder (pre-school), Non-formal primary education (NFPE), Post primary assistance program (PPAP), Vocational education program (VEP) for boys and girl (Welding, Carpentry Sewing and Electrical), FY - 2000.

Grade	Jamehpur				Mirpur				Pubail				Kathura				Grand Total
	No class	Boy	Girl	Total	No class	Boy	Girl	Total	No class	Boy	Girl	Total	No class	Boy	Girl	Total	
Feeder	36	403	392	795	18	262	279	541	22	278	257	535	32	409	423	832	2703
G.I	17	273	237	510	13	192	220	412	11	153	163	316	18	211	239	450	1688
G.II	8	128	112	240	13	186	195	381	9	122	145	267	17	191	217	408	1296
G.III	6	98	82	180	10	146	161	307	10	147	150	297	14	152	188	340	1124
G.IV	5	100	52	152	7	104	112	216	9	111	114	225	11	125	139	264	857
G.V	5	97	53	150	7	77	100	177	9	91	109	200	7	84	88	172	699
PPAP		50	13	63		13	8	21		19	17	36		19	5	24	144
VEP		5		5			16	16		45		45		12		12	78
Total				2095				2071				1921				2502	8589

NFPE

第18回 バングラデシュ寺子屋訪問ツアー (2000. 3.3~17)

～旅の流れ～

3月 3日(金)	成田発～(バンコクを経由して)ダッカ着
4日(土)	午前:アルパートさんによるBDPの説明 午後:ニューマーケットにてショッピング
5日(日)	午前:ミルプール地区のBDPschool訪問 午後:マラカール先生のお話 vocational school(職業訓練学校)訪問 教会にて主日礼拝参加
6日(月)	午前:ダッカからプーバイルへ 午後:BDPschool&vocational school訪問 BDPschoolの先生方との交わり・ディスカッション
7日(火)	プーバイルからジャマルプールへ ・各BDPschool訪問 ・ジャマルプール滞在中、2泊3日をガロ族の村で過ごす。3/12(日)はガロ族の教会に出席
14日(火)	午前:ジャマルプールからダッカへ 午後:ショッピング
15日(水)	午前:拡大シェアリング(ACEFメンバー) 午後:BDPschoolの子どもたちによるカルチャーショー BDPスタッフとの最後の夕食会
16日(木)	午前:BDPスタッフとのディスカッション 午後:ダッカから日本へ
17日(金)	午前:成田着

★:



*
go to the
new world ...
*

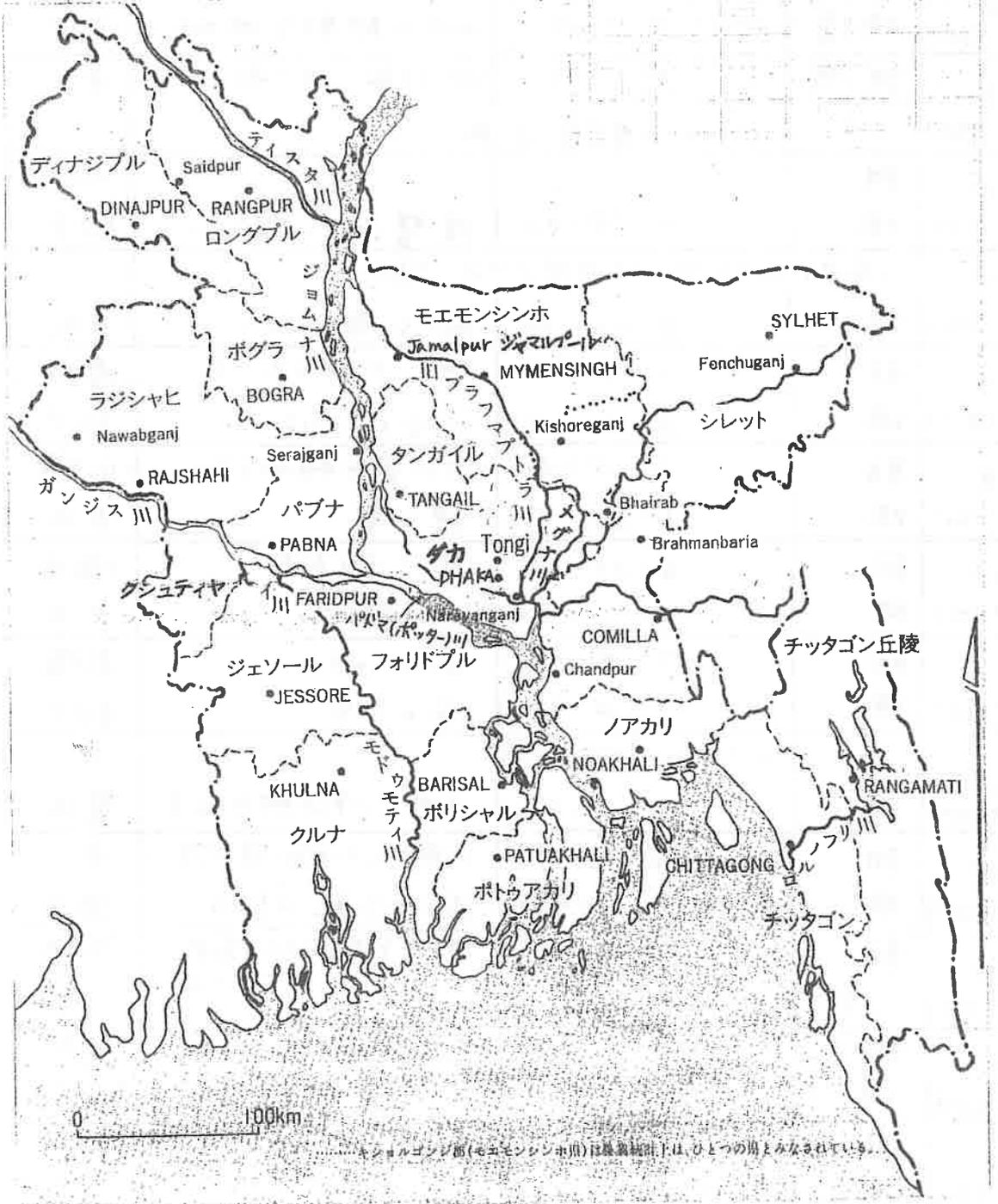


第18回 Study Tour 礼拝 日程表



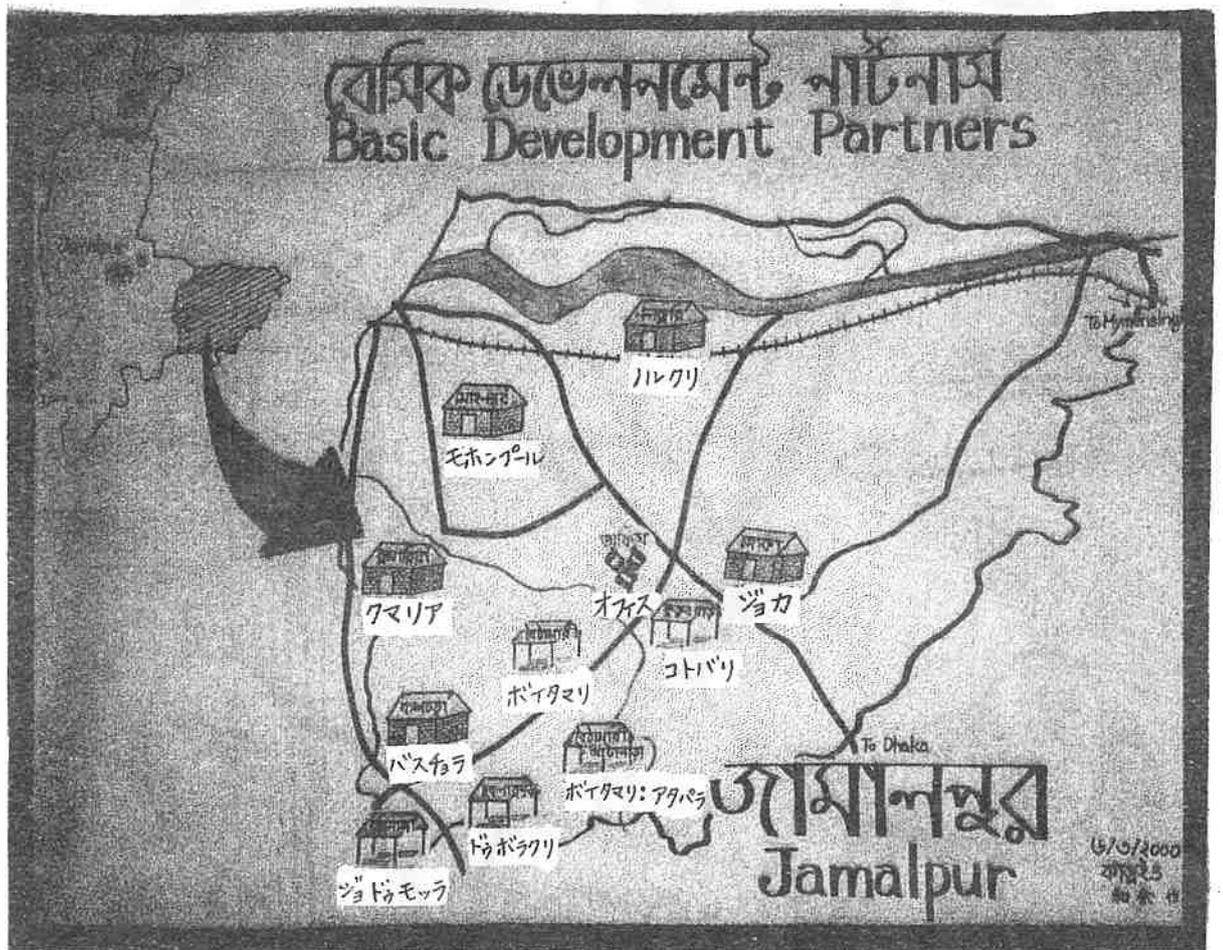
3/4 (Sat)	開会礼拝 晩示齋	ルカ 10:25~37 マタイ 5:1~12	善いサマリア人 山上の説教を始める	矢沢 船戸
5 (Sun)	朝示齋	5:13~16 バンガール教会出席	地の塩、世の光	井上
6 (Mon)	朝 晩	5:38~42	復讐してはならない	アロバト 船戸
7 (Tue)	晩	(早朝、ジャマル70-10ハ出発のため、なし) 5:43~48	敵を愛しなさい	矢沢
8 (Wed)	朝 晩	6:1~4 6:5~15	施しをするときには 祈るときには	逢坂 船戸
9 (Thu)	朝 晩	6:19~21 6:24	天に富を積みなさい 神と富	小石幾 矢沢
10 (Fri)	朝 晩	6:25~34 7:1~6	思い悩むな 人を裁くな	塩田 井上
11 (Sat)	朝 晩	7:7~12 7:24~29	求めなさい 家と土台	高橋 船戸
12 (Sun)	晩	バンガール教会出席 14:13~21	五千人に食べ物を与える	豊木
13 (Mon)	朝 晩	18:1~5 18:10~14	天国でいちばん偉い者 「迷い出た羊」のたとえ	朴 南出
14 (Tue)	朝	18:21~35 (ダッカに戻るため、なし)	「仲間を救えない家来」 のたとえ	久野
15 (Wed)	朝 晩	19:16~30 20:20~28	金持ちの青年 ヤコブとヨハネの母の願い	矢沢 井上
16 (Thu)	開会礼拝	ルカ 19:1~10	徴税人がアカブ	船戸

Map I - Bangladesh -

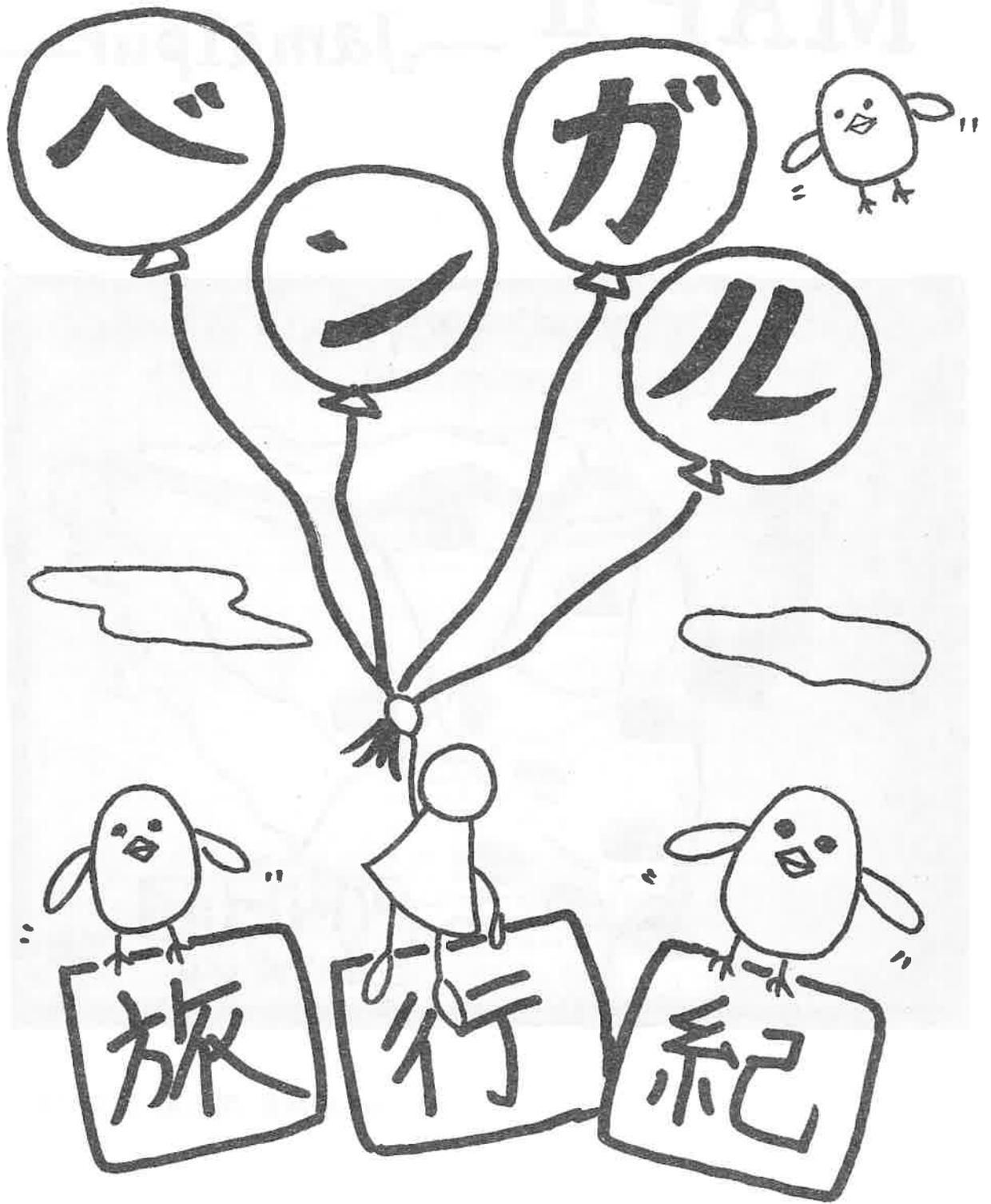


「もっと知りたいバングラデッシュ」弘文堂より

MAP II —Jamalpur—



ST参加者 南出和余さん作





人物紹介



矢澤 サユル 励太

チームリーダーのヤキマン

各地でお劇し"サウ

マイケルジャクソン=ダンスを被露!!

みんなを盛りあげるステキな

リーダーマン

高橋 ハナ 明子



その名の通りいつも明るく

元気なソ"ウマン。な"せ"に

空腹時と眠い時にカラ元気になる性質

けど"バ"ンガ"ル語の熱意は誰にも負けた

愛人をたくさんもつ人気者なのだ"



久野 バーク 由里子

最年少 高校生のトラマン

食べる早さは新幹線組

ポイントは口をモゴモゴさせて、手を高速で

動かす、カレーをつかむとらしい。

他に元気の良さとしかり者 番という

タイトルを持っている。



朴 ククル 大信

多くを語るな"イヌマン

しかし、エエリングでの発言や、

あてまな歌で"サ"V"をつかみど"リ"ク

私、子供と遊ぶ"イヌマン、

好きだ、た"た"あ"!!! 



豊木 バートル 喜会

TOUR中に誕生日経てた

おサルマン、日本ではマツキヨ

で働く薬剤士マンなのに、てきと"な

薬の説明をしていたため"もみんなが

倒れた時は"か"こ"よ"か"た"よ" —



逢坂 ゼラル 容子

白衣の天使を目指すネコマン

おサルマンと一緒にみんなを

気がかりしてくれました。でも普段は

ぼよ"ん"とした空気を持っている。

トラマンとは仲が良いけど"ケ"カ"友"達



塩田 コルゴ"シユ 恵

日本食をいっぱい持っている

うさぎ"さん、蚊(モ"シ)が"

嫌"た"ため"に"常に"長"そ"で"を着"て"いた。

虫よけスプレーを3日間で"カラ"に"した。

食べるのは遅くとも"買"い"物"は"早い。



小磯 パキ 摩耶子

元小学校の先生の子"マン

いろんな子供たちと仲良く

なるのが得意、マ"ラ"=キ"リ"平"の"

お"バ"さん(特"に"リ"エ"ト"さん)と"可"也"仲"良"し

写真もたくさんとり、誰"れ"も"活"動"的"に

動きまわっていた。

3月3日 (金)

Go to Bangladesh!

準備会が2週間、久々にみんなに会う。手続きを順調に進ませ、何と! 予想外にも定刻どおり Biman Bangladesh 航空に乗ることになりました。そしてひとまず"Bankok"へ!!

バンコクは暑い。暑かった。乗りつぎの途中で日本人の旅行者に出会う。彼らは行きたりば、たいてい、ビザも持たずにバンコクに1日滞在しようとしていた。私たちがいろいろたずねると、横には一人が「オマニョセグタイ」と連絡、そこはバンコクを見つめた……。

再び飛行機に乗り、今度は Dhaka!!



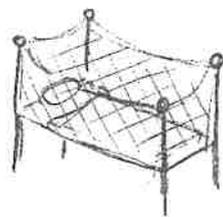
バンコクについて驚いたのは蚊が多すぎた。メグなんて、飛行機の中が心配して虫よけを振りまいていた。空港も、日本よりお困り感にさせず、みんな笑顔で BDP のスタッフたちと出会った。

空港がカリタスの宿舎に行く途中、交通状態がめちゃくちゃ渋りにみんなが、くり! リキキもベビタクも車もバスも同じ所を走るもんだから、渋滞がすごい。排気ガスもすごい。おかげで踏切の閉まった線路内で何カ所か始まる人もいる始末。

そんな中無事に宿舎に着いた私たちを待っていたのは **停電**。

自家発電の明かりの中、初めてカレーを手で食べる。

そして初めて蚊帳をばり就床……。



3月4日 (土)

バンコク第1日目

午前中、アルバートマンからお話を聞く。BDPが必要だからバンコクの現状を話してくれた。中でも、初等、中等教育10年間を続け続けられるのは100人中3人(かいたいとい)話に皆驚いていた。日本であたり前に与えられてきたことに感謝していた。またアルバートマンが子供たちに愛を持って接してほしいと

おもしろいイベントに参った。

午後は New Market へみんなで行って買い物に行く。

女の子はサロワカニソースを買った、男の子はルンギを買った。



一緒に歩いてきたので、カコイさん

がボロイ (小丸リニガ) を2つずつ私たちにくれて、

車が重くなるのを待っていた時だった。物をいれる子供たちも

車のまわりを集って来た。しかしオニムズルバ "いす" に、発車でき

ずにはいた。子供たちはどんどん増える。どう接していいか

わからず、私たちはただ発車を待った。しかし、摩耶子さんが何人かと仲良くなり、発車してからも走り車をいっただけで追いかけてくれた。

ニヤニヤと相手のエピソードでは、「愛を持って接する」というアルバートさんの言葉について、改めて考えさせられていた。



3月5日(日) 初めての学校訪問

午前中、Mirpu 1 と 2 の 2 校を訪れる。初めてで、

ボロボロが手配しか準備してなかったため、皆不安いっしょに

教室に向かった。けれど教室に入ると、子供たちの笑顔を見た

そんな心配はとにかき飛んでいった。私達はそれぞれ、花をたたく

もりの、子供たちと幸せな時間を過ごした。

カリタスに戻り、お昼を食って、昼寝 time が終わった。

私はカリタスで、昨日来たお話をマウカール先生とお話する機会

でした。そして vocational school へと、女性の立場に関すること

をお話して下った。

その後、YMCA の敷地内の vocational school に訪問した。

ここでは小学校で使われていた算数の教材や家具を作ったり

していた。夜は寝てはいても出た。たか vocational school
のような所があって、Drop out してまで通え制度があるのは
ありがたいことだ。

DHAKA office に立ち寄り、教会へ向かう。礼拝では讚美
歌と大きな声で歌、ていてステキだった。

3月6日(日) | プーバイルに行く!!

朝のDHAKAの渋滞の中をぬけ、プーバイルへ。排ガスの臭いが
いつの間にかなくなると、気がけが美しい田園風景が広がる。
プーバイルにはこんな綺麗な景色が、言っても通りの美しい所だ。

一面緑の広がる。目を覚ましてみよう。

プーバイルに着いて朝食をとるあと、学校訪問へ。

車で行くには細い道。プーバイルから請書してくれようとも
かまわず、オサムさんはアクセルを踏む!! ギャ~~~~

気がつくとも私たちは無事だった。「もう、なんで道なの——」

「二カ——」と叫び続けた私たちが方角を振り返って

二カ——  の笑顔のオサムさん。いつかの子供たち
と誰かだと思った。しかし彼の腕にも及ばない程直の状態が
悪く、バイクに乗りかえて進む。

着いた所は、おびやかな平野で、建ててくれた小学校。
校舎は建てて35日、雨季はどうあるのかという心配はある
ものの、村の人たちが建ててくれたことに意味があるという、おび
やかなおびやかな村の知恵が、どうも伝わってきた。

中でも心に残ったプライベートの話も2つ。

① 人の悩みや苦しみの悩みは価値(はい)の悩みだ。

- 40% ... 明日、自分が死んだらどうしようなどのありえない未来について
- 30% ... 過去のことをくよくよと
- 22% ... 自分の行いを変えたいと思うけどどうしよう
- 残り8% ... まともな悩み。自分でどうにかできる悩み。

② J O Y という言葉は

Jesus Others You からできていて、自分がやばいものでもなく、他の人や生き物とも愛する。だから(僕ら)も素直にならせた。

その晩、眠る前は何人かで、日本の歌を歌って過ごした。

その時、歌う私たちが横で、ファルークとムハメド・バニガールポップミュージックのセッティングをまっつろ踊っていた。... ス、ステキだった。

3月7日(火) いざ! ジャマルプール

朝、6:30 ——。

予定通り) 今日からラジオ体操、3天行。眠い——

1日だけの滞在と打ってつけたプールを後にする。

短い期間に、これだけ早く人々幸せをもらった。美しいこの地をみんなが離れがたそう。

移動中、みんなの眠り、荷物、車を降りて歌、刺繍と様々な時間を過ごした。その間、開発33で、茶屋33と美しい自然を守り続けることに同時に、行くことが大切で、難しさについて

みんな考えていたよ。

次はゴビールと異なり景色は、ゴビールに到着した。officeにはスタッフたちと南出和守さん、私たちを迎えてくれた。

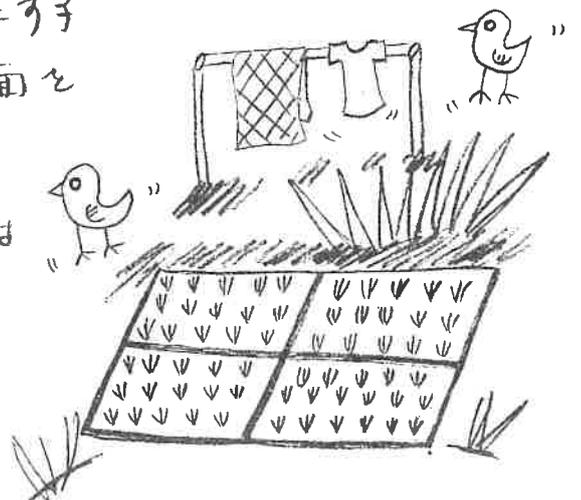
この日は完全な移動日であつたので、昼食をとり、お茶を飲み、昼寝と自由時間とつた。気がついたのは、ゴビールの味は各地でちがうというのだ。そしてゴビールの味が一番おいしいというのだ。

昼寝が起き、明日の学校訪問に備えて、みんな遊びを考えようというので、この時摩耶さんがみんなに作ってくれた指人形の動物たちで、木まねかぶきをやろう！というので、練習開始！！

偶然のことで、これは私たちの宝物とつた。

その後、近くの村の子供たちと遊び、ひまわり、もみくちでさかたべも楽しい時間。村にも連れて行ってもらう、たくさんのお花をもらう。しほいワルをして、一人をひいて、他の人の花をとり、その人にわたす子どなど、子供たちのいろいろな面を見て、とてもおもしろかつた。

これは毎日期待せがいは、いろいろな楽しい幸せな一日だ。



われらが Supervisors of Jamalpur ♥



モクレスさん

とっても優しく、
繊細な心の持ち
主。まるで王子の
様。彼の美顔に
女性陣は皆ドキ
ドキ。でも彼には
既に美人の彼女が
いるらしい。チッ。
お別れの前夜から
涙をうかべたこと
が印象的だよ。

ジョフィークさん

ジャマルプルオフィスの
長！ギターを弾き語り
のお得意。グラサン
かいて、白い便車を乗り
回すお姿は、いかにもビースト
感じ。いつも暖かい眼差しで
私達を見守って下さいました。

ハビブさん

一見普通一の優しそ
うな兄貴...でも実はそれ
だけではないんだな。宴
会のおよに見せた上半身
裸の情熱的な躍
り！ここは00バーか？と
皆の錯覚(そ)にみた、
熱いステキな方でした。

バセットさん

いつも冗談ば
かり言ってる。皆を笑
わせてました。
メンバーをからかう
のが大好き。
お茶目なんだから
おまねおめめを
キラキラさせて。いつも
ニコニコ...
歌のとっても上手な
方でした。

...真ん中に陣取っているのは誰かしら？なんてオイシイ位置に
いるんでしょう。明るくて、優し〜い彼らと1週間も共に
過ごせて、たくさん思い出つくて、私達は幸せでした♡

I love you ~!!

(つづき)

8月
午前

☁️ とよどき ☀️

雨天のために上校訪問の予定が1校に変更。
道路がぬかるんで車が使えないために、リキシャで移動すること
に。発リキリヤア皆の心は弾む。

9:00 a.m. ★リキシャにゴトゴト中られ。 ボイタマリ・スクール へ。



トタン屋根に木が柱、
ぬかんだ土の中、1つポツンと建て
ていた。
女の先生のみ。

◎質問タイムが設けられた。

Q. 「日本を知ってる？」

A. 「ジー!! (うん!!)」

Q. 「どこにあるの？」

A. 「遠いところ!!」

それなら...

Q. 「月と日本とはどちらの遠い(ほう?)」

この間に、子どもたちは一斉に「日本ー!!」

と答えたのでした。どうして? と問うと、

A. 「だってお月様は見えないけれど、日本は
見えなもん!!」

一同、思わず微笑んでしまいました。

♪持参したピアノ、リコーダー、タンバリン等を使って、「おもちゃのチャチャ」
「ドレミの歌」を披露。

午後 降り続く激しい雨のため、学校訪問は中止。

(全くバンガラはまじに「南の島の大王」の歌詞とおりの世界。
雨の降、たらお休みでー。... 雨期の学校運営にも関心がわく。)

3:00 p.m. 暇つぶしに... BDPスタッフ & メンバーによる大合唱大会
はじまる!

ベンガルソング、日本の歌、とどれることよく歌いおぼたてに。

ピアノ等楽器の大活躍。楽器なんてなくても、机をたたいて

リズム打ってたは。喧天盛り上げで、雨なんてそらりや、果しい瞬間

がもてた。音楽とは、万国共通の素晴らしいコミュニケーション手段だと
誰もが実感した。ハズ。

Sharing

◦「リキシャに乗る」という行為から、道路が舗装されていないことの不便さ、
リキシャーさん(運転手)と自分たちの貧富の差を改めて感じる。

◦この国の医療制度について; 保険制度が確立されていない。

(医師) 治療費を高くとる。

(病人) お金がないので看てもらえない

↓
たくさん稼げる。

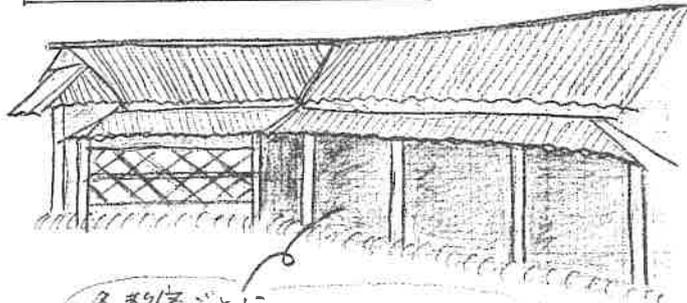
↓
死を待つばかり。

こうして増々貧富の差が広がっている。

○ 政府 vs NGO 団体の問題について；政府は今回 NGO 活動に対して (規制をかけるようとしている。

○ 今日のメンバーの名言。
 “(暗い部屋を明るく照らすろうそくの火を見て)
 外からは、中の人々の顔がろうそくの火によってよく見えるが、中からは闇につつまれの外の人々の顔を見ることはできない。仮に先に包まれた部屋の中を先進国 (日本)、外を途上国 (バングラ) とするならば...”

9日 ☀️ 午前
 新設校 ショドムラスクールへ行く予定だったが、昨夜から降りつづく雨のため道路がぬかるみ車が使えないために中止。
 (一昨誰か雨男なんだから...ねえ、レタさん?)
 ☆ モホンポールスクール へ



各教室ごとに黒板・机・椅子が備えつけられている

- ・ 大きな学校!
- ・ たくさん教室有り。しかしそれらは壁でしまわれているのではなく、ただ柱の存在のみであら。 (= つつぬけ)
- ・ 生徒数多し。
- ・ 設備の整ったイメージ。

♪ 広ーい校庭で、日本の歌を合奏。
 子どもたちは、「前にならえ」をしてきれいに並んで観てくれた。
 「大きな栗の下で」も皆で振りソフアに挑戦!



皆楽しんでくれたのかな?
 他にも、長縄やしゃぼん玉、折り紙、ボールなど、メンバーが持ち寄った小道具で、幾つかのグループに分かれて遊びました。

午後 ★ ゴトッバリ スクール へ。

- ・1つの小さな小屋
- ・すぐ近くに民家などもあり、地域に根付いた学校、というイメージ
- ・生徒数もそれ程多くはない。

♪ 「ボロ・シャルゴン(大子なこぶ)」初上演!
 村人ならも、何事か!?とどんどん集まり。
 あ、という間に小さな校庭は大ステージへ早変わり。
 がわいい(3体をはった??)人形劇は、子供のみならず、大人にまで大ウケ。見事大成功!
 更に、終了後、ヘントエムの「この物語から何かわかってもらえますか?」との問いに、「1人の男の子は、
 「一人でできる事は大変なことも、皆でやればできる」と元気に答えてくれたので。
 わかってもらえたーと安堵するメンバー。
 と同時に、自らも、もう一度、この物語のメッセージを味わい直した。



♪ 村の人たちと語り機会アリ。

- 村の女性から... 家事や育児などについて、日本ではどうしているのか、という質問。やはり家事-子育てに関心がある様です。
- メンバーから... (子どもたちへ)
 放課後は何をしたいのか?
 A. 木のぼり、人形遊び、等。

Sharing

・寺子屋の建て何年も経、に所では方言(あっても英語を話せる子供が多くなる)の建て間もない所では殆んどいない、という事実を目の当たりにし、寺子屋普及の重要性を再認識した。

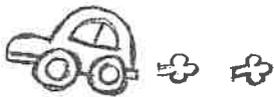
・子供たちの'want'の気持ちの強さに驚かされる。何に対して吸収してやろう、学んでやろう、という様子はイヤイヤと11月を待つ彼ら。学びの姿勢の見本をたたくつけられる感がある。一方、日本の子供のことを考えると、彼らにはあまりに物や快適な環境を与えられ過ぎていて、自分から何かを望む、という気持ちの自然と薄まってきているのではいかと思われ。そしてこれは、物だけでなく自分の将来に対しても言える傾向ではあるのか。

10日
午前



一時ジャマルプールを離れ、インド国境付近のボフシガンジ
へと向かった。ボフシガンジはガロ族の住む地域。初訪地
である。途中、ブラマプトラツを渡るため、車ごとフェリーに乗る。そ
してその船上では、またもや、物乞いをする人や商人など、様々な人に遭
うのである。そこから様々なことを思い巡らさずメンバー。...とそのとき!

「ハプニング」発生!!



なんと、我がオシムダーの車と、シヨアーフ
さんの愛車との、フェリー上で衝突したのだ。
借しくも、シヨアーフさんご自慢の車は
前の方の破損...。幸い二人こそ出な
かったが、事故である。

それでもそれでも、スタッフたちは「オシムダーナイ！」シヨアーフさんは...笑った!!
そして私達も、驚いたことに何の心配もせず...あくまで「これのバングラ」
と冷静沉着。カーン...、カリバングラ慣れしてしまっ...

その後も、何事もなかったかの如くに、各ドライバー、オシムダーの快調な
走りは延々とつづいたのである。注)時速130km以上!!

午後

新設のゲストハウスである「BONO PHUL」
に無事到着。マセットさんからスタッフに迎えられ
その建物つきれいに一同感動。各部屋ごと
トイレも水道もある! (1か所か、その水は
便利さよりも、水のきれいな、自然美
ジャマルプールの方を恋しく思う面々
なのである。)



4:00
p.m.

少数民族であるガロ族の村を訪問。
村人たちに、彼らの生活様式について聞く機会もできた。

- * ガロ族: モンゴロイド系 (驚く程日本人と似ている!)
- 昔から少数民族に国境近くに住み、ひっそりと暮らすことを余儀なくされてきた。
- 男が出稼せざるに、女が家を守る母系社会。
- 文化面で日本と似たものを多く持つ。
- ④ 飲酒の習慣、子どものための工作、正座の習慣、新桶祭を行う。

Sharing

・様々な場面において「選択」できるチャンスを持つ、という日本人。

そんな贅沢な暮らしの中、自分の必要と欲望とを区別し、いかに自覚をもって生きるか、が重要である。

・バングラ国内の社会的身分の差を実感。何故この様な不条理がこの世に存在するのだろう。(しかしユニゾム入切なことは、この正見実から決して目を背けず、自分に出来ることは何なりかを考え、それを何らかの形で実行していく意志と勇気をもつこと。これが我々に求められていることに違いない。

11日
午前

午前中に3校回るといふハードスケジュール!

★ チョーリパラ・スクール

20人程度の生徒のいた、校庭あり。

♪ いつも如く、合唱と合奏と。「大まなはら」を上演する。
子どもたちから、手作りの花の首飾りと種々の首飾りをもらって happy ♪



赤、ピンク、黄色、いろいろな色!
ピン/バント

♪ いろいろな色の花の首飾りを
みんなの心をあでやかに
花の首飾りに合わせて
つけてあげよう♡
素敵〜〜〜カワイイ♡

★ ハラジエリー・スクール

ガハ族の子どもも多く通う学校。正座する子も見られた。
30人程度、校庭あり。



▲ これがガハ族の学校だ! 柱は竹、屋根は青いビニールシートであった。

- ♪ 従来の発表に加え、「はなもんめ」「ロンドン橋」などを「遊んだ」。前者は、通訳を通して説明し、何となくでもの、おもしろさを理解してもらえたかどうか…イマイチだった？ 後者は非常に盛り上がった！

★ いよいよ3校目。コネガンダ・スクールへ

30人程度、広ーい校庭あり。

教室は1つ。

私達が言われた時には、英語の時間だったらしく、A~Gのアルファベットを1人1人大きな声で読み上げていた。(1人10回位ずつ、延々と繰り返す…)

- ♪ 「大きなかぶ」、合奏、「だまさん車」に「馬とび」、フリスビー等、広い校庭を利用して様々な遊びを展開。

午後

がほ族の農村の人々との交流。

子どもたちとこま回しを遊ぶ等、思い思いに交流をした。

大人と discuss する機会もあり。

皆、本当に早いうちから結婚して子どもを作っているんだね、と実感。子どもが1人〜2人いた。

Sharing

- バングラの子供たちは、大家族の中、それぞれに役割を課せられている。そのせいで遊ぶ時間など、多少犠牲になっている部分もある。役目を果たすことにより、人の役に立っているという自信を得ることから、まていさように思われる。このことを踏まえると、子どものしつけにおいて、何でも手交すぎしてしまえば、ひいてはその子は「自信喪失」に陥ってしまうのではなからうか、ある程度の苦境の中、努力することの大切なことである。
- 経済的に大きく差のある先進国と後進国。これからこれらの、この世界の中どうバランスをとっていくかの鍵となる。その際、決して忘れてはならないことは、例えばある国を援助するときには、その国民の一体何を望んでいるのか、ということを常に念頭におき行動する、ということであろう。

3月12日 (SUN)



午前

○朝早くからカゴの村にある“デイブラコリ教会”
へ向かい、礼拝に参加。

教会までの道のりはでこぼこ道で
浅津良の川を渡るなど、冒険で
した。

ウツの群れ
に遭遇!!



○教会の帰り道にある“デイブラコリ school”を訪問。
と、その時... 「ガッ——ッ」と突然スコールのような雨が
降ってきた。教室内へ浸水したため、しぼし授業は中断。
雨の降る教室で、アルフス一万尺をしたりして遊んだ。



♪ ボロボロ パパレ (大きな大きな山の)
 ♪ ツェンドゥーレ バリテ (きれいな お家で)
 ♪ ミレミツエ ナーチコリ (みんなまで仲良く踊って)
 ♪ ボンドウ ホエー (友達にやりますよ。)
 ハイ! ランラ・ランラ・ランランラン...
 (かずよん作)



カゴの先生方がマンディー語
で歌をうたって下さいまし
た!!



ツェンドゥーレ
ガン!

午後

ボクシングジムからジャマルプールへ移動。

オツムさんの運転は、たよ、たよと100km/時以上!!

途中、後輪タイヤがパンクする accident があつたけれど、スパアタイヤに交換し、一件落着。

夕方には無事に小寝かしの恋しかつた **ジャマルプール** に着いたのでした。

今日の sharing

3日ぶりに ジャマルプールへ戻ってきて、皆 嬉しい気持ち、ホッとした気持ちを抱いたようでした。あこちゃんの『自分の家に帰ってきたみたい!!』の叫びに始まり、(それを聞いたときの Aモントさんの顔は **ニカニカ** だったそりな。) ジャマルプールの staff や キッチンのお母さん方とのコミュニケーションや心の交流が深まっていることを皆が実感した1日でした。 <お互いが喜びを分かち合うことはすばらしい!>

3月13日 (MON)

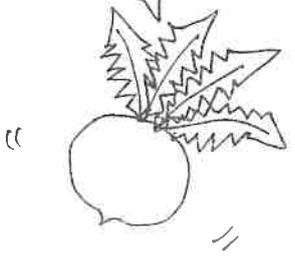
午前

寺子屋訪問も最終日。 ジャマルプールで、そして Study Tour での最後の訪問となつた学校は "ドゥグラコリ" と "バツツエ ヅョウ" の2校であった。

〜ドゥグラコリ校で〜

お「大きなかぶ」上演!!

おかしう、長縄もしましたね



エーイヨ エーイヨ エーイヨ!! モーストボロ
シャルゴーン、トウレフェルロ~~~~ツ。
(よいはよいはよいは、大きなかぶが)
ぬけました。

みんなの声に合わせて、かぶ役のオツムさんもかぶと共にドォ~~~~ンと飛びはねました!!

午後

学校の先生方が来て、私達にサリーを着せてくださいました。



この間 男性 member は shopping へ...

◎ 夜は 《 Joint Sharing 》 開催。

Jamalpur で過ごす最後の夜、メンバーと ジャムナル Staff で Sharing を行いました。

皆が、Jamalpur で共に過ごして感じたことを思い思いに話し、わかち合いました。

ジョナックさん : 「今回のメンバーは今まで以上に私達とよくコミュニケーションができていて印象深く思う。」
ハモントさん : 「すべての学校において、また啓蒙の子どもに限らず近所の子どもに対してもメンバー一人一人が子ども達と笑顔でよくコミュニケーションができていたことを嬉しく思う。」

※ Staff の方々からのバシシ温まる言葉 ※
そしてまだまだ夜は終わらずに...

◎ 『BDP staffs in Jamalpur はいける』の巻き ◎

ジョナックさんのギターでの語り弾きに始まり、ハモントさんの情熱的ベンガリー song。さらにバセットさんが変身して登場し、伝統的な (?!) 踊りと歌で盛り上がる。

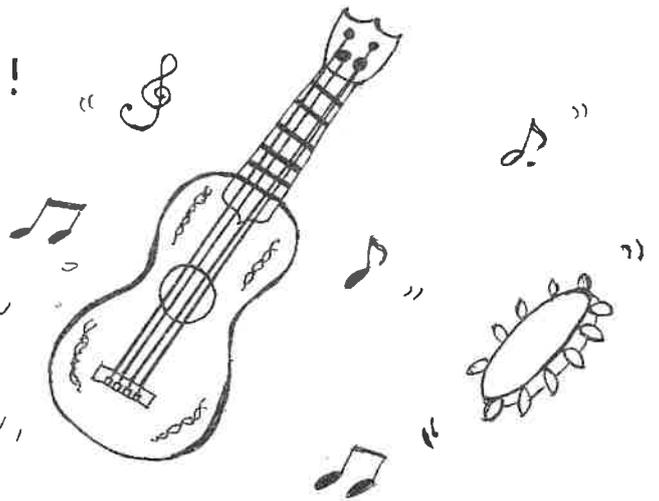
歌えや踊れやの大宴会!!!

オツムさんも タンバリン片手に
パワー全開。

ハモントさんも はじけていました。
タンバリン手にセパ はねていまし
たねえ...

しまいには、キッチンのお母さん、
モタレグさんも加わって...

さらに 扇太さんの マケル ジャクソン Dance が 続いて、みんなで
輪になって 手をつなぎ、「Change the World」をうたった。
歌を通して 喜びをわち合い、共に 喜びの時を持つことが
できた すばらしい時間でした。



3月14日 (TUE)



午前

楽しかった ツェマルポールでの生活を終え、ツェマルポールからダッカ
へ移動。

移動途中、車酔いをしてしまったメンバーがいた。

メンバーの調子が良くなったため、早急で近くのハモントさんの
知りあいのお家へお邪魔することになった。

そのお家のお父さんは、私達をバシバシと迎え入れて下さった。
この happening が 私達に 新たな人々との出会いを与え
てくれた!!

午後

予定より少々遅れて ダッカに到着。

• Free time にて アーロンへ go shopping.

アーロンへは 初の ベビー タクシーに乗って行った。

< 日々の思いで >



ジャマルプールのスタッフと、



—いつもおいしい食事を作ってくれる
ジャマルプールのおばさんたち



ある日の食事風景 今日 美味しいディム（卵）カレー



リキシャで学校へ



プーバイルの先生方と話し合い

< 村や町で >



スラムの子供、元気いっぱい



ガロの村の子供達、日本のどこかの村で遊んでいそうな



ジャマルプール、村へと続く道



村の子供達と、何を話しているのかな



ガロの村での楽しいひととき



おててつないでどこいくの



ガロの人達の、山の上の小さな小さな教会

＜学校の子供



子供達に囲まれて



「ハイヨ ハイヨ ハイヨ・・・」



「マイム マイム マイム マイム・・・」広い校庭で一緒に遊ぶ



おもちゃのちゃちゃちゃ 「あ、間違えた」



達と一緒に >



・」おおきなかぶの熱演



パキ (鳥)



コルゴッシュ (兔)



「折り紙教えて」



「ここ どう読むの」



一緒に勉強 「むずかしい」

< 学校 大好き >



「次の問題やってみましょう。」



アルファベット書けるよ



「これ わかりますか」



教科書かかえて、うれしいな



「はい。」



お姉さんといっしょに



今日開校、ボケーショナリースクールの生徒達の
喜びの表情



ボクシガンジの小学校の子供達

3月15日 (WED)

Happy Birthday!
ひーちゃん♡

午前

Study tour メンバー でのまとめの sharing が行われた。

〜〜〜 Sharing のよか〜〜〜

- かの村を訪れたことが印象的だった。 (后太さん)
- ツマルポールで キッチンのお母さんが自ら踊りを教えてくれた。
- バングラデッシュの人々との会話では、「in our country」(摩耶子さん) と始まることが明かった。 (大信さん)
- 感謝の気持ちを大切に思いうことができた。 (喜会さん)
- リキツヤの運転手さんと言葉が通じなくても心を通わせることができた。 (明子さん)
- 「共に生きていく」ことの大切さを感じた。 (恵さん)
- バングラデッシュの人々の生活に人間の本来あるべき姿を感じた。 (裕子さん)
- 「喜び」は自分だけでなく他者の喜びから生まれて
輪が広がることを思った。 (儀子さん)
- BDP staff とメンバーとの友わりがよく行われていたと思った。
(船戸先生)

午後

BDP school の子ども達も先生方による“Cultural Show”
が開かれた。

子ども達は歌、劇、踊りを披露してくれた。

私達は“おもちゃのチャチャ”の合唱、「大きなかぶ」の劇をした。



3月16日 (THU)

今日はとうとう、バングラデッシュから日本へ帰る日。

午前

BDP staffと共に“合同 拡大 sharing”が行われた。

~~~~~ Sharing のなかで ~~~~~

• 皆が共通に持った課題 (フォーバティルの school の先生からの  
問い合わせ)

『So what?』 (バングラデッシュに来て  
どうなるのか)

『What will I do?』 (自分はどうしていくのか)

• 心にしみる言葉

“The purpose of life is to give love.”

“Joy finally comes from give.”

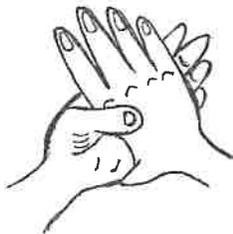
午後

出発までBDP staffたちと語り合い、歌をうたつて過ごした。

夕方、ダッカの宿舎 Caritas を出発。

BDP staff とメンバー みんなで車輪になり、手をつなぎ

お祈りとシャロームを歌ってお別れをした。



クリントン大統領訪問前  
で、緊張感の漂う街  
の中、バスは空港へ……。

友よ、また会う日まで、  
シャローム シャローム  
めぐみの主 まもりたもく、  
シャローム シャローム。

『ありがとう』

バングラデッシュ。』

# Members of BDP Dhaka office



Hemanta

歌がとっても上手。  
 ベンガル song を私  
 達に被露してくれた。  
 歌をうたうダンディー  
 な姿と子猫も達へに  
 向ける笑顔が魅力的♡



Albert

BDP office ならぬ、BDP  
 の長。とてもおだや  
 かに見えるが、実は  
 真顔で冗談をとばす  
 得意技が...  
 皆、尊敬のまなざし  
 を向ける人物。☆☆



Lipika

Mirpur地区のorgan  
 izer。  
 いつもお母さんのよかつ温  
 かいほほえみで包ん  
 でくれる。そんな一方で  
 “働く女性”として素敵な  
 姿がある。♡



Ambrose

背高のっほでひよろ、  
 といっているのが彼の特徴。  
 口数は少ないものの、  
 知的な魅力が漂  
 っている。



Faruk

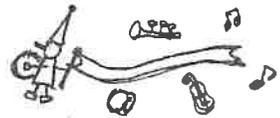
何も言わずとも、いつも  
 彼の瞳は何かを語  
 りかけている!!  
 にんまりしたファレク  
 さんの笑顔は印象的。  
 彼の笑顔にみんな  
 とりこ。♡



Ashim

誰もが認める名ドライ  
 バー。🚗  
 険しい道もなんのその。  
 100km/時以上のスピード  
 でかっ飛ばす。  
 ガングリン片手にはしゃぐ  
 彼の姿はまるで少年の  
 よう♡♡

# SONG [ガ<sup>ン</sup>ン]



私達が、学校訪問の時に子供達と一緒に歌ったり、BDPのスタッフの方々とよく歌った曲を紹介します。

アルプス一万尺は、南出和余さんが訳して下さったものです。

## ♥ プロトン バングラデシュ

プロトン バングラデシュ アマル シェシュ バングラデシュ

ジボン バングラデシュ アマル モロン バングラデシュ

2行繰り返し

バングラデシュ バングラデシュ バングラデシュ

バングラデシュ バングラデシュ バングラデシュ

アマル アギーナ チョラス ビーチャヌ ショナ ショナ ドウリコナ

マティル モモタイ ガーシポーショレ ショブジェル アルボナ

2行繰り返し

アマル タティ ホイエチェ ショブネル ビーズボナー

プロトン バングラデシュ アマル シェシュ バングラデシュ

ジボン バングラデシュ アマル モロン バングラデシュ

2行繰り返し

バングラデシュ バングラデシュ バングラデシュ

バングラデシュ バングラデシュ バングラデシュ

バングラデシュ バングラデシュ バングラデシュ

1970年のサイクロンで50万人もの人々が命を失い、1971年の独立戦争での大規模虐殺、難民流出、1974年の大洪水、大飢饉など、1970年代前半のバングラデシュは悲惨な事態の連続でした。それらに呼応して、欧米で「ヘルプ・バングラデシュ」のキャンペーンが巻き起こり、ビートルズのジョージ・ハリソンがこの歌を歌い、広く世界に呼びかけ有名になりました。

# わが黄金のベンガル

— バングラデシュ国歌 —



Bangladesh's national song !!

R. タゴール作  
我妻和男訳

私の黄金のベンガルよ！ 私はあなたを愛す、  
あなたの空、あなたの風が、とこしえに  
私の生命の中で、笛を吹き鳴らす、  
ああ、母なるベンガルよ、ファルグン月<sup>1)</sup>に、  
あなたのマンゴーの森で、芳しき香が、私を酔い痴らす、  
ああ、素晴らしい、何ともいえない——  
ああ、母なるベンガルよ、オグラン月<sup>2)</sup>に、  
あなたの実りに満ちた田に、私は、何と  
甘美な微笑みを、みたことだろう。

何と華麗なる輝きよ！ 何という蔭よ！  
何という愛情よ、何という慈しみよ  
パニヤンの木の根元に、川の岸辺、岸辺に  
あなたは、何と麗しい、サリーの裾を上げたのだろう  
母なるベンガルよ、あなたの言葉は、  
甘露のように、私の耳に響く  
ああ、素晴らしい、何ともいえない——  
母よ、あなたの顔が、青ざめるとき  
ああ、母よ、私は涙にむせぶ。

আমার সোনার বাংলা আমি তোমায় ভালবাসি  
আমার সোনার বাংলা আমি তোমায় ভালবাসি  
চিরদিন তোমার আকাশ, চিরদিন তোমার আকাশ  
তোমার বাতাস, আমার প্রাণ  
ও মা আমার প্রাণে বাজায় বাঁশী  
সোনার বাংলা আমি তোমায় ভালবাসি ।  
ও মা ফাগুনে তোর আমের বনে  
প্রাণে মাগল করে  
যরি হয়, হয় রে  
ও মা ফাগুনে তোর আমের বনে  
প্রাণে মাগল করে  
ও মা অপ্রাণে তোর ভরা ক্ষেতে কি দেখেছি  
আমি কি দেখেছি মধুর হাসি  
সোনার বাংলা আমি তোমায় ভালবাসি ।

Bengali Song (エイ ポッダー) (1971年の独立記念の歌)

- (M) エイ ポッダー (F) エイ メグレナー \* (M)は男声, (F)は女声  
(M, F) エイ ジョムナシュロマ ノデトーテュー  
(F) アマール ラカール モン ガンゲージャエ  
(M) アマール ラカール モン ガンゲージャエ  
(F) エ アマール デーシュ (M) エ アマール プレーム  
(M, F) アノンド ベドナエ ミロノ ビロホ ションコーテュー  
コト アノンド ベドナエ ミロノ ビロホ ションコーテュー  
(F) エイ モドゥモティ ダンシリ ノディルティレ  
(M) ニジェケ ハリエ ジェノ パイ フィレ フィレ  
(F) エイ モドゥモティ ダンシリ ノディルティレ  
(M) ニジェケ ハリエ ジェノ パイ フィレ フィレ  
(M, F) エク ニルデゥ コピタル プロチョッドボテ  
アノンド ベドナエ ミロノ ビロホ ションコーテュー  
コト アノンド ベドナエ ミロノ ビロホ ションコーテュー  
(F) エイ ポッダー (M) エイ メグレナー  
(M, F) エイ ハジャーラ ノディール オボバヒカ  
エカネ ロモニグロ ノディールモトイ  
ノディオ ナリルモト コタ コエー  
(F) エイ オバリト ショブジェル プラント チュエー  
(M) ニルヴォエ ニルアカシュ ロエチェ ヌエー  
(F) エイ オバリト ショブジェル プラント チュエー  
(M) ニルヴォエ ニルアカシュ ロエチェ ヌエー  
(M, F) ジェノ リドエル ヴァロバシャ リドエ フォター  
アノンド ベドナエ ミロノ ビロホ ションコーテュー  
コト アノンド ベドナエ ミロノ ビロホ ションコーテュー  
(M, F) エイ ポッダー エイ メグレナー  
エイ ジョムナシュロマ ノデイトーテュー  
アマール ラカール モン ガンゲージャエ  
アマール ラカール モン ガンゲージャエ  
エ アマール デーシュ エ アマール プレーム  
アノンド ベドナエ ミロノ ビロホ ションコーテュー  
コト アノンド ベドナエ ミロノ ビロホ ションコーテュー  
コト アノンド ベドナエ ミロノ ビロホ ションコーテュー

ポッダー河よ メグナー河よ ジョモシュルマ河よ その岸辺で  
牛飼いの我が心は 歌い続ける 牛飼いの我が心は 歌い続ける  
我が祖国を 我が愛を 喜びと悲しみを 出会いと別れを そして祖国の危機を  
数多くの 喜びと悲しみを 出会いと別れを そして祖国の危機を  
この モドゥモティ河畔の田畑 その岸辺で 我らは 失われた 自らを 繰り返しみつけだす  
一冊の 青い表紙の本 喜びと悲しみを ……………  
ポッダー河よ メグナー河よ この千本にも達する 多くの河々よ  
ここで 女の人たちは 河のように語り 河も 女の人たちのように語りかける  
この 広々とした 緑の大地の果てに 怖れもなく 空は その端を大地に接し  
空と 緑の大地が お互いの心に 同じ愛情の花を咲かせる 喜びと悲しみを ……………  
(くりかえし)

幸せなら手をたたこう (ベンガル語版)

① মুখী যদি হাত চাও তালি দাও  
 シュキ ジョディ ホテ チャオ タリ ダオ  
 幸せに もし になりたいなら 手をたたこう



মুখী যদি হাত চাও তালি দাও  
 シュキ ジョディ ホテ チャオ タリ ダオ  
 幸せに もし になりたいなら 手をたたこう

যদি মুখী হতে চাও দুঃখ ব্যথা ভুলে যাও  
 ジョディ シュキ ホテ チャオ ドウッコ ペタ ヴレ ジャオ  
 もし 幸せに になりたいなら 悲しみの痛みを 忘れてください

দাও অবাই হাতে তালি দাও  
 だオ ショ~バイ ハティ タリ だオ  
 みんなで 手を たたこう

② মুখী যদি হাত চাও পা মিলিও  
 シュキ ジョディ ホテ チャオ পা মিラও  
 幸せに もし になりたいなら 足を 合わせよう

মুখী যদি হাত চাও পা মিলিও  
 シュキ জোডি হোতে চাও পা মিলাও  
 幸せに もし になりたいなら 足を 合わせよう

যদি মুখী হতে চাও সব মিলে পা মিলিও  
 জোডি শুকি হোতে চাও শোবে মিলাও পা মিলাও  
 もし 幸せに になりたいなら みんなで一緒に 足を 合わせよう

যত দুঃখ সব ভুলে যাও  
 জোত দুঃখ সব ভুলে যাও  
 ある 悲しみは みんな 忘れてください

● 大きな栗の木の下で



大きなくりの木の下で  
 ボロボロ ガチェ ニチュエテ

あなたとわたし  
 トウミ エボン ア~ミ

বড় বড় গাছে লীচতে

তুমি এবং আমি

なかよく遊びましょう  
 ミレミシエ ケラコリ

大きなくりの木の下で  
 ボロボロ ガチェ ニチュエテ

মিলেমিলে খেলা করি

বড় বড় গাছে লীচতে



アルプス一万尺

ボロボロ パハレ

大きな大きな山の

シュンドウル バリテ

きれいな家で

ミレミシエ ナーチコリ

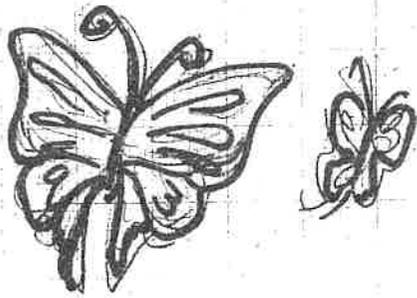
みんなで仲良く踊って

ボンドウ ホエー

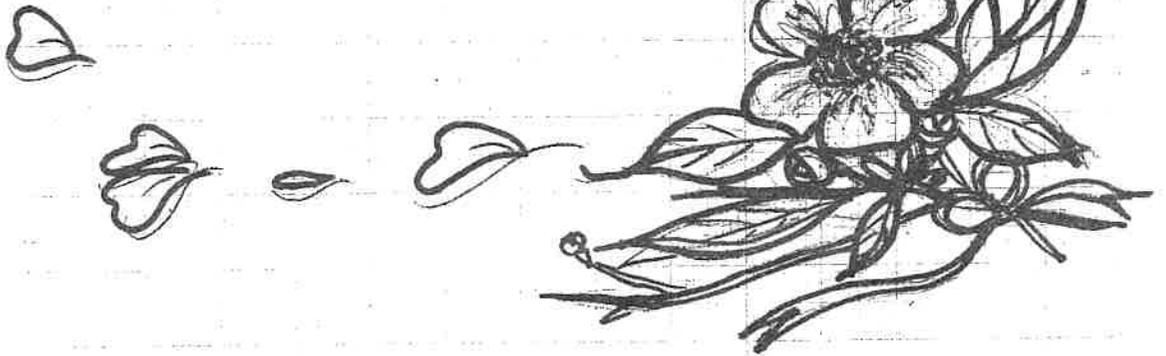
友達になりましょう

ランランランラン ランランランラン...





全メンバーによる  
感想文集



Messages for you .....

2000.4.

## 日本人の匂いがしない

船戸 良隆



2000年春のスタディー・ツアーは過去17回の内、最も参加者の少ないチーム編成でした。事務局員を入れて10名でしたが、現地から小野道子さんと南出和余さんが参加してくださり、総勢12名となりました。現地経験が豊かなお二人の参加は、メンバーにとって、とても良い出会いでしたし、お二人にとってもリフレッシュのよい機会であったと思います。人数は少なかったのですが、内容は素晴らしく深く印象に残るものでした。

さて、スタディー・ツアーでは、毎回、多くの学びを得ますが、今回は、小磯摩耶子さんの言葉が深く思い起こされます。

彼女は、ネパールやアフリカなど、各地の「日本人が支援している、または、建てた学校」を訪問することを趣味(?) 使命としている、おもしろい経験の持ち主です。初日、ダッカでの学校訪問を終えた彼女曰く、「びっくりしました。ネパールの学校でも、日本人の関係しているところは、何となく日本人の匂いがするんですが、このBDPの寺子屋学校は、全然、日本人の匂いがしないんです。私も、かなり沢山の学校を訪問していますが、こんな学校は初めてです。きっと、地域の方々と密着して、地域の方々の学校になっているからでしょう。」

翌日、私たちはダッカ郊外の農村、プーバイル村に移動し、すこし時間にゆとりが出来ました。そこでわたしは、彼女に彼女がもった感想をそのまま、リーダーのアルバートさんに伝えるよう促しました。彼女の話聞いたアルバートさんは、満面喜色、とても喜んでいました。

BDP/ACEFは共に創立10周年を迎えますが、その間、ACEFは日本人の価値観をBDPに押しつけるとか、日本人が主であることにならないよう努めてきたつもりです。しかし、いつの間にか、それが当然のことのようになってきて、あまり意識もしなくなっていました。ですが、本当のところ、ここが重要なのです。10周年を機に、もう一度、あの有名な「Go to the people」という詩の一節を復唱したいと思いました。

「最もよい指導者が仕事をすれば、その仕事が完成した時に人々は言うでしょう。

『この仕事を成し遂げたのは、わたしたちなのだ。』と。」

# 喜びの輪が広がる

井上 儀子



バングラデシュ北部ジャマルプール県にBDPの寺子屋学校が始まってから8年が経ちます。保守的なイスラム教徒の村が多く、最初の頃は、外国人を見たことがないという村人たちが日本人を見るために遠くの村から集まって来た、などという話も聞きました。

首都ダッカのスラム地区では人々の生活は厳しくても、子どもたちも先生も笑顔がいっぱい活気にあふれています。その様子を見た後に農村部に移動すると、農村では教室の中で子どもたちも先生も笑顔が少ないのが気になっていました。家庭の外に出たことのない女の人を先生として採用することは、大変なことだったようです。ましてや外国人が授業の様子を見に来る、ダッカからスタッフも来ているとなると、緊張するのは当然かもしれません。ところがこの8年の間に、BDPは先生のトレーニングを積み重ね、教室で楽しい授業を展開する方法を学び合い、教室での雰囲気は年々明るくなってきました。

昨年からはまった山岳少数民族ガロの村でも、先生が終始満面の笑みを浮かべて私たちが歓迎してくださったことがとても印象的でした。先生が笑顔であれば、子どもたちも楽しく笑顔になり、私たちが笑顔で接すれば、相手も笑顔で応えてくれる、その喜びの輪はどんどん広がることを感じました。

先生方のトレーニングと同じように、私たちの交流のしかたも年々よくなってきているのかもしれませんが。スタッフのヘモントさんは、私たちメンバー一人一人の子どもたちとの交わりも、BDPスタッフとの交わりも、今までで一番よかったとおっしゃってくださいました。「フレンドシップに笑顔は欠かせない。」とおっしゃったヘモントさんの喜びの笑顔が私の脳裏に焼き付いています。



## バングラを鏡として

矢澤 勲太

今回のスタディー・ツアーを通して特に印象深かったことは3つあります。第一はガロ族の村に入り、村人とともに礼拝を守る機会が与えられたことです。村で最も長く生きているというおじいさんから、最初にキリスト教がもたらされた頃の様子をいろいろお聞きすることができ、とても興味をかき立てられました。最初にこの地域で伝道を始めたアメリカの宣教師の奮闘に思いを馳せたことでした。

第二はどこの学校でも私たちの出し物の決め手となった「大きなカブ」の人形劇です。メンバーの一人が作ってきた個性あふれる可愛らしい指人形、事務局の井上さんが用意してきたベンガル語のストーリー、配役、登場の順番の決定など、さまざまな偶然的要素が見事に重なって、実に楽しい劇ができ上がりました。一人一人が賜物を出し合えば、とても大きなことができるし、そのうちどれ一つが欠けてもいけないのだというこの劇のメッセージを、皆が実際にこの劇を演じながら教えられました。

第三は今回のメンバーたちの積極性です。学校の子供たちはもちろん、オフィスのスタッフや給仕のおばさんやお兄さん、近所の子供たちなど、あらゆる人たちとコミュニケーションを試みるチャレンジ精神、自分からどんどんそうした人たちの中に入って行って関わりを作り出していこうとする意欲には脱帽しました。ジャマルプールを出発する日の朝、台所のおばさんたちも見送りに出てきて、涙を拭きながらメンバーと握手していた姿が今でも忘れられません。

私たちが旅の中で出会った多くの人々が、” IN OUR COUNTRY, ” と初めに言って、自分の国ではこれこれの状況だが、お前の国ではどうかと尋ねてきました。政治や経済、教育や沖縄の問題、少数民族の問題など、さまざまなことを聞かれました。その度に十分に答えられない自分にもどかしさを感じたのは、おそらく私だけではないと思います。アルバートさんは最後のディスカッションの時間に、バングラを鏡として自分自身を発見してほしいとおっしゃっていましたが、私たちがバングラの現実と出会い、それと向き合うことが同時に、自己が問われること、自己を問うことを意味し得るのではないのでしょうか。バングラを鏡として見つめつつ踏み出すメンバー一人一人の新しい歩みが始まっています。

最後に、今回学生でありながらリーダーの役を与えられ、多くの貴重な学びをさせていただく機会を与えられましたことに心から感謝いたします。協力してくれたメンバーのみんな、どうもありがとう。

## バングラデシュで得たこと

逢坂 容子

バングラデシュの首都、ダッカに着くとすぐに私は目の前の光景に驚きを感じずにはいられなかった。信号のない大きな道路でクラクションを所構わず鳴り響かせ、お互い車体がぶつからんと言わんばかりに行きかう車。そして車が多く行きかう車道を縫うようにして横断する人々。この国には社会秩序というものはないのかと驚きを超えて困惑の念を持ったのを憶えている。突如として目に飛び込んできた光景に驚くばかりでなく、その後、私はBDPの現地スタッフの方から再び衝撃的事実を聞かされることとなる。

バングラデシュは世界一貧しい国と言われている通り、国民の52%が十分な生活を得ていない。また、下痢や飢餓で亡くなる人も多い。バングラデシュのそんな状況の中でBDPが必要と考えたことは「基礎的な人間のニーズを満たすこと。」であった。その具体的な目標としては、

- ①人口増加を抑制すること。
- ②人々が1日に220kcalの必要最低限の栄養摂取を可能とすること。
- ③人々が教育を受けられること。

であった。そして、10年間の教育において、その過程を最後まで経ることができるのは100人中たった3.4人であると知った。子ども達がdrop outしてしまう原因のほとんどが家庭の経済的問題によるものである。物質的に豊かで食べ物も当たり前でありふれており、肥満化が心配される日本。教育を受けるのが当然の世の中で登校拒否児の増加に悩む日本。私達の世間では常識である事実はこの地に来てことごとく覆された。

今回のstudy tourは首都ダッカにあるミルプールの学校訪問に始まり、プーバイル、さらに北上してジャマルプール、そして少数民族であるガロ族の住むボクシガンジーへと、多くの場所を訪ねることができた。

訪問先の学校は開校して間もない学校も多かった。学校といってもほとんどが屋根とそれを支える木の柱のみで建っている貧弱なもので、壁がなく、吹き抜けになった壊れんばかりの建物の一角で授業を行う学校もあった。しかし、学校で勉強する子ども達の姿は生き生きとしていた。どの子も毎日学校へ来ると言い、学校で勉強するのが楽しいと言う。彼らは勉強できることに喜びを見出していた。学校訪問をする度に出会った彼らの無邪気で喜びに満ちた笑顔が今も私の脳裏に鮮明に思い浮かんでくる。一緒に校庭で遊んだこと。みんなの笑顔のなか、「大きなかぶ」の劇をしたこと。学校からの帰り道、子どもと手をつないで歌を歌いながら歩いたこと……。私は子ども達と過ごしていた時の自分が好きだった。それは、子ども達と私との関わりのなかで「愛」の通い合いが相互になされていたからではないだろうか。

子ども達だけでなく、学校の先生方と交流する機会も与えられた。プーバイ

ルでの学校の先生方との交わりの時は私にとって、とても印象的であった。先生の質問において、「日本の学生は学校以外ではどう過ごしているか」とあった。大学生である私が普段の生活のことを話した中で先生方が注目したことはアルバイトについてであった。「アルバイトはなぜやっているのか。それはあなたにとって必要性があるのか。」このような鋭い質問に私は答える言葉を失った。 Bangladesh の女性が先生として働いている理由は少なくともその場にいた先生方全員が家族の生活を支えるためであった。それは当然であるとさえ彼女らは言い切っていた。一方で私はアルバイトというものにはっきりとした目的意識を持っていなかったことを思い知らされた。今までの生活において、私は自分自身の行動1つ1つに目的意識を持っていたのだろうか、と疑問を抱くと共に自分を恥じる気持ちでいっぱいになった。また、さらに鋭い質問が投げかけられた。「あなた方はここに来てどうなるのか。この後日本に帰ってどうなるのか。」この言葉は私達の夜のシェアリングでも大きく取り上げられた。私はこの言葉を心に留めて、この Bangladesh での経験をこれからの自分の生き方につなげていこうと強く思った。

Bangladesh での経験を通して私が得られたと確信していることがある。それは「相手に愛を持って接することの大切さ」を知った、ということである。子ども達の内から流れ出てくる笑顔。BDP スタッフと歌を通して同じ時を共有することの喜びを分かち合い、コミュニケーションを通して彼らの温かい心に触れたこと。食事を毎日作って下さるキッチンのお母さん達と言葉が通じなくても笑顔や肌で感じた心の通い合い。Bangladesh の人々の豊かな心に触れて、彼らからいっぱいの愛を注がれたことで私自身も相手と愛を持って接することの喜びや愛を与えることのすばらしさを知ることができた。

study tour における私の Bangladesh での経験を日本に帰ってきた今、ゆっくり時間をかけて消化し、その経験に自分なりの意味を見出そうと考えている。この経験は私の人生において宝物であると胸を張って断言できる自分がある。



いっぱい笑顔とやさしさをありがとう。そして.....。

小磯摩耶子

ベンガルの詩を読む子供達の元気な声が聞こえて来る。机も椅子も、壁さえもない小さな小さな学校、そこで学ぶ子供達の瞳はキラキラと輝き、若い女の先生はさわやかな笑顔で一人一人にやさしく声をかける。どこの学校に行っても、多くの困難をかかえながらも、これから伸びていく息吹のようなものが感じられ、村人の表情からは自分達の学校に対する誇りと期待と喜びが読み取れた。BDPとACEFの指導と支援が地域に受け入れられ、うまく機能しているを見るのはほんとうに嬉しいことだった。しかし、私が今度の旅でもらった喜びは、そんなすてきな学校やそこに通う子供達からだけではなかった。

学校の子供達の笑顔に心満たされていたある日の帰り、スラムにほど近いダッカの街角でのこと、私達の乗った車が止まっていると、「バクシーシ」「バクシーシ」「マネー」マネー」と車の窓にたくさんの小さな手がのびてきた。今会ってきた瞳を輝かせて勉強をしていた学校の子供達と同じ年ごろなのにはと思いながら、なす術もなく、つらく悲しい思いで目をそらした。でも、この子たちとこんな関係で終わりにたくないという思いから、ちらっと横目で笑いかけてみると、一人の女の子が、窓に手をかけて、真っ白い歯を見せてニッコリ笑った。救われた思いで今度は思いっきりの笑顔でニッコリと笑いかけると、その子は「トマル ナム キー」と聞いて来る。「アマル ナム マヤ、トマル ナムキー」「アマル ナム ラジータ」そんな会話が始まった。後からきた子が、「バクシーシ」と手を出そうとすると、ラジータは「ノーバクシーシ」と言って手で制してから、その子を引き寄せて名前を教えてくれる。そんなことをしているうちに子供達が次から次に寄って来た。自分の名前を教えてくれる男の子、思いっきり背伸びをして握手をしようとする小さなはだかんぼの男の子、まぶたをひっくり返しておどけて見せる女の子.....、どの子も満面の笑顔で競いあっておしゃべりし、手をふれる。車が走り出すと、たくさんの子供達が「アバデカホベ」「アバデカホベ」と手をふりながら追いかけて来る。リキシヤとミニタクの間を縫うようにして走り抜け走りぬけ、どこまでもどこまでも.....。この子たちに私は何をしてあげたと言うのか。何の本質的な解決にもなっていないが、あのつらい場面を救ってくれたのはラジータ、そしてスラムの子供達の底抜けの笑顔だった。

村の道を歩いていると、近くの家の中から子供を抱いた女性たちが集まってきて、もの珍しげに私たちが過ぎていくのをじっと見ている。こちらから「アッサラーム アライクム」と挨拶したり、「写真をとっていい」などと声をかけると、彼女たちははにかんだようにちょっと首をかしげ、ニコッと小さなやさしい笑顔をうかべる。ジャマルプールでおいしい食事を作ってくれたおばさん達もそんなやさしい笑顔を持っていた。その笑顔に誘われて食器洗いもさせてもらった。ナンンの作り方も教わった。遅い手で洗濯物も絞ってくれた。そして、明日帰るという日のこと、ルフィナさんがそっと手招きしてつれていったのは洗濯物の陰、そこでピョンピョンと両足でとび、フフ、フフと笑いながら手を取り合って踊った。そして、調理小屋の中で、外での男の人の気配を気にしながら、耳元でささやくように長い長い歌を歌ってくれた。

ある日、雨上がりの水溜まりばかりのぬかるみ道をリキシヤで走った。若いリキシヤワラーは、水溜まりに車輪がはまらないように、右に左に実にじょうずによけながら、ある時は自

転車から飛び降りて全身の力をこめてリキシャを引き、またある時は細い足に全体重を乗せかけて力一杯自転車をこいでいく。二人の人間をのせたリキシャを進めていくこの瘦せた青年のどこにそんな力があるのだろう。細いはだしの足の動きを見ていると、頼もしくもあるがやはり悲しい。この青年はいつ肉入りカレーを食べたのだろう。そんなことを考えていると、私の心を読み取ったかのように青年はチラッと後ろをふりかえってニッコリ笑った。こんな激しい労働をしながらどうしてあんなやさしい笑顔ができるのだろう。あの笑顔が忘れられない。

様々な人達との素敵な出会いが次々にうかんで来る。BDPのスタッフの心のコもったもてなしと笑顔をはじめとして、バングラディッシュに滞在した二週間に数えきれないほどの笑顔とやさしさをもらった。それは、貧しく厳しい現実の中でも失われることのない心の豊かさであり、また、私達が物質的豊かさと時間に追われる日常の中で、ついついこぼしそうになる精神的豊かさでもあった。でも、だからなおさら、その笑顔の裏にある現実の厳しさに心が痛む。

ガロの小学校をた訪ねたとき、激しい雨が降り始めた。子供達も先生も、もちろんわたしたちも、学校（むしろのようなもので囲った小さな小屋）の真ん中で、流れ込んで来る雨水をよけながら、おしくらまんじゅうのように体を寄せあったまま、ただただ雨のあがるのを待った。机や椅子はもちろん、校舎の壁も屋根さえもない学校がある。「せっかくの学校も雨季になると雨がやむまで勉強ができない。子供もこない。」と言っていたスタッフの言葉が実感された一時だった。

学校の子供達が安心して勉強ができるように。スラムの子供が「バクシーシ」と手を出さなくてすむように、全ての子供達が学校に通えるように。そして、食事作りのおばさんや村の女性たちが、豊かになって、自由に楽しく歌い、踊れるように。リキシャワラーが肉入りカレーをいっぱい食べて命を縮める事なく元気で働けるように。そして、学校の先生やBDPのスタッフたちの教育に対する、そして国の将来に対する熱い思いが少しずつでも実現していくように。。。。。

「あなたたちは日本に帰ってどうするのですか。ここに来たことにどういう意味があるのですか。」とある先生に言われた厳しい問いにどう答えていくのかがこれからの大きな課題だ。わたしの周りにはたくさん仲間と子供達に、私がもらったバングラディッシュの人々のやさしさと厳しい現実を伝えたい。そして、この問いの答えを一緒に考えていくことが日本の子供達や子供達のために頑張っている仲間に対するおみやげでもあるし、バングラディッシュの人達へのお返しでもあるのだと思っている。

プーパイルでの最後の夕方、BDPのスタッフとバングラディッシュの大地に沈んでいく大きな夕日を見た。人々に限りのない恵みを与える太陽は世界中どこでも同じ。この一つの太陽の元で、地球上の様々な地域に生きる人達が、それぞれの地域の気候風土の中で築いてきた文化や生き方を尊重しあいながら、皆が手を取り合って平等で平和な世界を作り上げていくことを願い、そのためのほんの少しでもお手伝いができたらと思う。



# Amar Bangladesh

—黄金の国ベンガル—

第18回スタディーツアーに寄せて

（おた）めぐみ  
塩田 恵

目を閉じると、眩しい光の中、一面に広がる水田地帯一人々の生きる糧 = 水田の緑美しい実に色鮮やかな光景が臉に浮かんでくる。タゴールの詩そのままの豊かな大地と、そこに住む豊かな心の人々、彼らの素晴らしい笑顔に私はすっかり魅せられてしまった。この様な美しい思いを、自分の心の中に蓄えられたことは何と素敵なことなのだろう。自国にいたのでは決して味わえなかったであろう貴重な体験ができたことを、本当に幸せに思う。バングラデシュでの2週間寺子屋の子どもたちをはじめ、たくさんの現地の人との触れ合い、そしてチームメンバーとの交流を通して、いくつもの感動を手に入れた。その一つ一つは全て私の大切なかけがえのない宝物として心に刻まれ、静かな光を放っている。限りなく穏やかな空間の中、本当に充実した日々が送れた。私の人生観を大きく変える、実に有意義な日々だった。

日頃、世界の現状が見えず、贅沢三昧な暮らしをしている私たち日本人に対して、彼らは暖かく迎え受け入れてくれ、本当に親切にして下さった。BDPスタッフをはじめとする現地における関係者の方々には敬意にも近い、深い感謝の念を抱いている。そう、人としてこの世界で生きてゆく上で最も大切なことは何であるか、何が生活を本当の意味で豊かにするのか、ということに彼らは、バングラデシュの人々は、身をもって教えてくれたのだ。他者を自分以上に愛することの大切さ、そしてその行為は他の誰でもない自分自身の幸福へとつながるということ、自分が現在ここにこうしていられることに対して感謝する気持ち、個々はとても弱い存在であり、それを認知した上で互いに助け合いつつ生きていく上で成り立つ社会、という観念。—これらは、激しい競争社会であり急速な発展を遂げ続ける、経済大国日本での多忙な生活においてはとかく軽視されがちで、しかし決して忘れてはならない感情なのであった。一旦、母国を離れ、異空間に身を置いたことで自分たちの生活がいかに異常な感覚のうちに成り立っているかに気付く、羞恥心を覚えると同時に危機迫る恐ろしい思いを味わうことができた。質素な彼らの生活により、正常な感覚を取り戻すことができたのである。また、彼らの純粋な性格、素直さ、感情表現の豊かさ巧みさにより、年をとるにつれ忘れかけていった子どもの頃の見返りを求めない素直な優しさと呼び覚ますことができたように思う。感謝の気持ちは尽きない。

バングラデシュは自国と比較した上でも、たとえ物質的には豊かでないにしても、与えられた環境の中で、実にうまく自然と共存しつつ住み良き社会をなしている国だと感心し、素晴らしい国だと思った。私の心にあるバングラデシュは、メディアで報じられているような最貧国でも何でもない。逆にある意味理想的な国家である。確かにこれは現地スタッフが細心の注意を払い、尽くしてくれた結果のあの贅沢な生活だったからこそ抱ける感情なのかも知れない。事実、治安や衛生面、教育上の問題等、改善されるべき深刻な問題は依然として多かった。人々にはもっと身の安全が保障されなければならず、開発し続けねばならないだろう（そしてそれには相当な時間を要すると思われる）。しかし、この国なら、これから理想的な発展が遂げられる気がするのである。今の先進

国のような排他的な発展の仕方ではなく、国を真に理解する人々＝バングラデシュ国民、が独立を勝ち取ったときのように、自らの手で徐々に発達してゆけると思うのだ。そう期待する。そしてその発展の中で果たさなければならない日本の役目はACEFの様なNGO活動が理に適っていると思われる。これから私は今回のツアーへの感謝のしるしとして、ACEF会員として、微力ではあっても何らかの手助けができれば、積極的にしていこう、と思っている。

帰国後、日本の傲慢な態度にはほとんど嫌気がさす状態だ。毎日山のように出るあのゴミの量！必要のない無駄なパッケージ、使い捨て精神にのっとった商品開発、過度に贅沢な暮らしぶり。（少し外界をのぞいてみれば貧困で苦しんでいる人々が何百万といえるのに・・・何も意識せずに過ごしていたら、これ程利己主義なことはない！）立ち止まる間もなく、急速に何かを追い求めて進化し続けるこの社会の流れは早すぎて大きすぎて私一人の力ではどうにも仕様がなく途方に暮れてしまうが、せめてこの感覚だけはいつまでも忘れることなく持ち続けていよう。（当面、色々が無駄に消費しないよう心がけている）そして皆に呼びかけよう。イトーヨーカ堂の小さな紙袋を日本人が持ってきたまま大事にカード入れとして使っていた先生や日本ではゴミとしてすぐに捨てられてしまうスーパーのビニール袋を通学用かばんとして使っていた子どもたちの姿を決して忘れまい。私たちの発展の仕方は、明らかに何かの間違っている。そして結果として異様な大国となっているが、これを一つの舟に捕らえるならば、操縦ミスで潮に流され、気づかぬまま目的地と違う方向へと進んでいるような・・・そのような状況にあると思えてならない。

最後に、今回のツアーが私に生きる勇気を、喜びを与えてくれたことも記しておきたい。このツアーで様々な人々と出会い、心の中に埋もれていた夢と向き合って、果敢に挑戦する勇気を与えてもらった。これは20歳という時期に、実にありがたい収穫物であったと思う。人生とは自分がつくり上げるものなのだから、物事を挑戦する前から諦める必要など、どこにもないのである。ゴールを設定し、そのゴールに向かって突き進んでからはじめて道ができる。そして人生とはその道のりのことを後から振り返ったときに言う呼び方にすぎないのだ。何か自分の中に生きる勇気が湧いてきて、自信が持てるようになった気がする。2週間の異空間での生活はなぜか私に自信までくれたようだ。・・・最終的に当初の目標と違うところにたどり着いても、何ら問題ない（オシユビダナイ！）。その過程での真摯な姿こそが重要視されるものなのだと再認識できた。

一その美しい神の国で、人々は確実に生きていた、

大人も子供も変わらない純粋な瞳で、  
そして、そこに、<sup>ハズレ</sup>20歳の私が、いた、  
たくさんの笑顔と光に包まれて、  
極上の笑みを称えながら、

"Love and Peace!

Joy comes from sharing!"

たくさんの感動を本当にありがとう。ドンノバット！



## たくさんの笑顔へ



報告書を書かなければならない状態になってもなお、何を書いたら良いのか悩んでしまいます。バングラから帰ってきてもう2週間以上が経過して、私はまた以前の生活に戻っています。まるであの日々がなかったかのように・・・

では20歳の私にとってこのツアーがバングラデシュという国での体験が何であったのか？ははっきりとわかっているのは、私がとても幸せな毎日を過ごせていたということと、大切な友人達と出会えたということです。

そして、これから生きていくのに必要なエッセンスをもらいました。幸せになるための、人が幸せでいるための、そういうエッセンスを。

そんなことを言ってもよくわからない感想文になってしまうので、私の愛しい人々を紹介してみたいと思います。

1. ファルークさん ベンガルポップミュージックが好きなファルークさん。カセットを聴きつつ一人で踊るおちゃめな一面も！多くを語らないものの、その瞳に私はメロメロになりました。
2. オシムムさん バングラで私と最高にラブラブになったBDPの運転手さん。かなりスリル満点な運転といたずらっ子の笑顔にみんなもクラクラしたはず。でも私の座はだれにも譲りませんよー！
3. ロシュマモールさん ジャマルプールのリキ車乗り。座席でうるさく歌いつづけ、「あれなに？」と質問攻めの私達に笑顔で相手をしてくれました。ダッカへ帰る日に見た至上最高の笑顔は忘れることができません。彼は今日もあの景色の中、リキ車をこいでいるでしょう。
4. ハビブさん 本名：ハビブザマン・カンさん。ラテン系(?)の素敵な瞳の持ち主。その語り口は情熱的！もっとたくさん話がしたかったと心残りもあります。
5. ヘモントさん ダッカオフィスのメンバーの1人で、私達についてきてくれました。すごく歌がうまくて、煙草を吸う姿も素敵でオシムムさんとはまた違う意味で私達の心をさらってしまいました。子供達に話し掛ける口ぶりと優しい目は見ているだけで幸せな

気分になりました。

6. カッコイさん 私達のショッピングに付き合ってくれた先生。とてもおしゃれで明るい、名前の通り素敵な方でした。
7. リナさん プーバイル地区の先生。私と同年なのに、土地を持っていて、稲を作り、家族を助けていました。日本での私には想像もつかないような、へこたれてしまいそうな生活。それでも明るい先生達は素敵だなと思いました。
8. はーちゃん 名前を聞いたのですが、忘れてしまいました。ガロの村の女の子で、私のいとこということになっています。かわいいんですよ！写真を見て納得してください。
9. リピカさん ダッカの：オーガナイザー。あまりお話する機会がなかったのですが、とても素敵な方で、お別れの時に泣きまくる私を笑顔で抱きしめてくださいました。

こうして挙げていくと足りないのではこの辺で止めますが、他にもたくさんのお会いがありました。今は全ての出会いに感謝の気持ちでいっぱいです。

バングラでの私は最高の自分でした。毎日心の底から笑って、たくさんものを見て、いろんなことを考えていました。それは私がこれまでにないくらい愛されていること、自分に与えられている物の多さを感じていたからだと思います。その気持ちを持ち続けることができるように、毎日を過ごしていけたらと思っています。

最後にヘモントさんが教えてくれたバングラのことわざを。

Money is lost, Nothing is lost

Health is lost, Something is lost

Character is lost, Everything is lost



ンノバット

高橋 明子

## 出 会 い

豊 木 喜 会



2 週間のスタディーツアーに出かけた。たくさんのお土産をもらった。大地、異文化、宗教、いろいろな事に会った。

バングラの素晴らしい出会いによって、私の心は開かれました。大地と心で物事をいろんな事に思いを馳せることができました。また、ジャマルプー地区にいた時は本当に好きでした。自分を素直に認められ喜びにあふれた毎日。心がすこやかなことでした。

バングラの子供達は、物質的には満たされなかった。何に對しても食欲で、特に印象に残ったのは、私達が学校を訪問した時の、彼らの強い眼差し、体に突きつけた事だった。人の視線を与えられるのではなく、自分で見つけ、興味を持った事に對して、真剣に取り組

もうとする彼のらのは瞳は決して忘れないだろ。う。  
バンがあつたの文化と出会った事に価値観によつて私  
中に人が生きていく物質的な豊かさを満ちたさ  
中た。人が生きていく物質的な豊かさを満ちたさ  
気付かない、心の豊かさを満ちたさ  
まな物が生まれました。

また、私にとつて宗教（キリスト教）との  
出合いも大きな事だった。ほとんどの宗教とは  
無縁の生活を送ってきた私にとって、毎日おさ  
祈りを送る事に祈ることとはある意味、自分を  
せられす事に祈ることとはある意味、自分を  
め直す事自身で生かすかと思ふ。毎日祈ること  
て、自分自身で生かすかと思ふ。毎日祈ること  
事ができるの礼拝や、お祈りによつて、考  
一でも毎日の事ができた。

このツアーの中で、いっぱい貴重な出合い  
をもらった。いろんな面で成長でき、自分を  
磨くことができた。この体験を心に留めて生  
きていきたい。

## 子供のようにならなければ…

朴 大信

アジアの中でも民族や言語、経済、文化、また宗教など、日本とは全く状況の異なる国、バングラデシュ。NGO 活動、文化比較などに興味があつての参加ということも言えるが、しかしこのスタディーツアー参加を決心した本当の理由は、別のところにあつた。世間では大人として扱われ、自分自身の社会的環境は徐々に整えられていく一方で、自己の弱さ・精神的未熟さを痛感しつつあつた私は、異国の地に身を置き、そこであらためて「人々」と、「自分自身」と、そして「神」との対話ができたかと望んでいた。そしてそこに新しい経験・学び・成長を静かに求めながら、バングラデシュの地に足を踏み入れた。

着いてからのバングラデシュの印象は、まさしく「混沌」であつた。あの交通事情の激しい道路上にその一端が象徴される。そうした中で、存在感を漂わせながら突き進んでいく高級車を一方で見たかと思えば、他方で赤ん坊を抱えて立ち止まり、道路の危険に身をさらしながら物乞いをする少女の姿が目映る。あまりにも対照的な光景が、同じ時間、同じ場所で当たり前のように混在している。しかし結局私には何もできず、目のやり場に躊躇する無力な自分にはただ傍観するしかないという事実が、混沌に混沌を重ねるようだった。だが、自分とこの現実とは決して無関係なものではなく、自分にはどんな応答ができ、何ができるのか？という問いが続く。

そんな「混沌」とした状況の中、しかし私はこの地でとても大切な宝ものを確かに受け取った気がする。それはきっと、ここに生きる人々の「素朴さ」によるものなのであろう。物心ともに特に何かを着飾るということもなく、“生きている”ということを感じさせる人々の息遣い。そして自分も、「何を食べようか、何を飲もうか、何を着ようか」ということに思いを煩わせることなく過ごすことができていると思う。これは言い換えれば、そうした外面的・物質的な欲（勿論、「必要」とは区別されるが）がかき立てられる余地がない程、それ以上に大切なものに目を向けさせられる生活だったからである。

私たちは多くの子供たちと出会い、言葉は通じなくても、皆コミュニケーションを上手くとり合いながら、本当に楽しく時を過ごすことができた。そして、私たちが子供たちに愛をもって接していたと、幾度となく BDP スタッフたちは喜んでいて。しかしそれは、実はすでに私が子供たちから愛を与えられていたからだったのだ。

ジャマルプールで出会った一人の少年のことが、どうしても忘れられない。ガロ族の村から戻ってきた私を見つけると、外から恥ずかしそうに顔を覗かせ、何度も手で招き寄せるしぐさをみせるのだった。外に出ると笑顔で私の名前を大きく呼び、手を握ってくる。こんな純粹に心を開いて、私を無条件に受け入れてくれたことへの喜びから、私も喜んで少年を愛することができた。愛は喜びと共にあるのだ。”Joy comes from sharing”と言っていたアルバートさんの言葉も印象的に思い出される。

「心を入れ替えて子供のようにならなければ、決して天の国に入ることはできない。自分を低くして、この子供のようになる人が、天の国でいちばん偉いのだ。」(マタイ 18:3)

私たちは子供にはなれなくても、子供のようになることはできる。あの少年のように、自然と自分を低くして相手を受け入れられるように祈りつづけたい。

そのジャマルプールでのある晩、私は食卓の上にある蝋燭の火を見ながら、少し不思議なことを考えていた。私たちのいる家の中から外を覗こうとしても、外は暗闇に包まれてほとんど何も見えない。しかし逆に外から家の中を覗くと、きつと蝋燭の光によって中の様子がよく見えるに違いない…。今仮に、蝋燭で明るい家の中を日本、暗闇に包まれた外をバングラデシュとしてみるのが許されるなら、どんなことが見えてくるだろうか…?

私たちは、実際に自分の足でその地に行くことで初めて、日本では見えなかったバングラデシュの姿が少し見え、日本では聞こえなかった人々の声や思いがかすかに聞こえてきた。そこは初め一見、暗闇や「混沌」のようであったが、しかしさらに一步踏み込んでみると、実はそこには「素朴さ」がある。そして汗を流しながら黙々と働く人々の姿、子供たちの無邪気な笑顔があることに気づく。そこから同時に私たちは、外の暗闇から蝋燭の火が灯る家の中を見渡すことができるのと同様、バングラデシュから日本を、またそこに暮らす自分の身の回りの生活を、そして自分自身の内を見ることができると思う。すると、今まで日本に居ては当たり前で気づかなかったこと、また、私たちがいつの間にか一つずつ失ってきた子供のような輝きを発見するのである。

今、私たちは再び日本での生活に戻っている。しかしこの日本に居ながらも、バングラデシュでの経験から培われた目で、自分自身のあり方を見つめ、さらに求め続けることができるのではないだろうか…。そんなことを考えさせる今回の旅であった。この貴重な旅を実現してくださった BDP スタッフ一人一人に、そして出会ったすべての人々に心から感謝します！



『The best thing we can give is LOVE』

「今は自分自身の成長のためにこのstudy tourに参加します。でもいつか必ずこの経験を他者のために生かしたいと思います」...

私は今現在18才。高校2年時、17才の夏に英国に留学し、18才の夏に日本に帰国しました。4月から高校3年生です。私には兄、姉、元家庭教師などこのACEFのstudy tourに参加経験のある知り合いがいて、そういう方々からのstudy tour、バングラデシュの良さをきき私もいつかはこのtourに参加しようと思っていました。そして、英国滞在中にその思いは強くなり、帰国した後、両親と相談の上、学年末テストを欠席するというリスクを犯してこのstudy tourに参加することを決意しました。

3月3日(金)ダッカに私たちは到着。「今までできてきたあのバングラデシュについて来たぞ。」と興奮していた矢先、空港からguest houseへのバスの外、8、9才ぐらいの女の子が私がそれまで見たことがないというぐらい悲しい顔をして赤ん坊を片手に窓をたたいていました。物乞いです。私はどうしていいかわからずただ下を向いていました。女の子はずっと窓をたたいていましたがバスが動きだすと笑顔で手を振ってくれました。私はその笑顔に救われ、ホッとしました。

3月4日(土)は午後にニューマーケットにshoppingに行く機会があり、皆で車でかけたのですが、その帰り、車が停車している時間が随分とあり、子供たちが車の外にたくさん集まってきて昨日と同じように、窓をたたき始めました。私は何かをする余裕などなく、目をそらすことしかできませんでしたが、memberのまよこさんは子供たちに名前をきいてみたり、自分の名前を言ってみたりしていました。そうすると彼らは物を求めるのではなく、まよこさんとcommunicationをとろうとし始めました。そして車が動きだすと子供たちは手を振りながら車の後を追いかけて走ってきました。

正直、私は同じ体験を2日続けてしている中でその状況から早く解放されたいと思っていました。その子供たちと目を合わすことも話をすることもできずただ苦しくてしかたありませんでした。バングラデシュがどういう国で、何故あのような子供たちがいるのか、彼らの人生はどのようなものなのか、私は何をすべきなのか、わからないことばかりで、ただ、その場所から逃げたかったのです。

その日の夜のsharingの時間にはやはりその日出会った物乞いの子供たちについて語る方が多くいました。その中でまよこさんは1人だけ彼らと関わりが持てたことが嬉しかったとおっしゃっていました。長い間停車していたおかげで彼らと心が通じあえて、それが嬉しかった、お金や物をあげただけであれば彼らはどのように車の後を追いかけて走ってはこなかっただろう、と。

まよこさんはお金や物を彼らにもたせたわけではなく、子供たちと会話をしようしました。彼ら一人一人の存在を認め、一人一人と話をしたのです。つまり、まよこさんが彼らにあげたものは愛だったのではないかと私は思います。

同じ場所において同じことを経験していても、愛を与えることができる人がいて、私は...私は逃げることしか考えられませんでした。

じゃあ、私ができることってなんなんだろう。  
study tour中私はそれを考えていました。

まよこさんが子供たちに愛をあげたその日、Albertは言いました。“The best thing we can give is love.”愛の表現方法は人それぞれです。私には私のそれがあるはずで、それをみつけるためには、その表現方法が身につくためにはそれなりのエネルギー、時間、技術が必要になってくると思います。

バングラデシュから帰ってきてもう2週間が過ぎました。study tour 中は色々経験して、感じて、悩んで、苦しんで心身ともに疲れて結局最後はダウンしてしまっただけなのですが、今はすごく精神的に安定しています。

tour前はすごく不安定で本音を言うと（両親には内緒ですが）本気で高校中退考えていたり（なんて親不孝者！）、学校2、3日勝手に休んで担任の先生から電話かかってきたり（問題児ですね）。。。英国に留学して、帰国して、進級を希望していたのに留年することになって、色々な変化に対応しきれなくて、友達は卒業してしまうし、1人焦っている自分がいて、何もかも面倒臭くなってモヤモヤしている毎日でした。でも、このstudy tourに参加してスッキリしました。あまりにも小さく無力な自分に気づかされ、そして、そのことを認めざるをえませんでした。私が今高校をやめても何もできません。むしろ「幸いにもまだ高校生」と思えるようになりました。まだ、先があるのです。私の愛を表現するために私が今すべきことは将来の自分を考え、イメージし、それに向かい努力をすることだとわかりました。今私がいるところとやれること、すべきことがハッキリしたのです。

こう考えられるのも、私がAlbertの言った“The best thing we can give is love.”という言葉をも身を持って感じることでできたからではないかと思っています。バングラデシュでの他者との関わりにはいつも愛があったと思うのです。言葉が伝わらなくても彼らの優しさ、温かさが伝わる、共にいることが心地よい。そういう仲間が得られたことに私は喜びを感じます。

愛というものの正確な定義は誰にも答えられないと思いますが、私はダッカで車を追いかけてきた子供たちとまよこさんの関わりに、バングラデシュで出会った人々との友情に、memberの間に愛を感じずにはられません。

冒頭の文章は私がこのstudy tourに参加する前にACEFに投稿した作文の中の一文です。私は“The best thing we can give is love”という言葉に胸に私なりの愛の表現方法を求め、これから歩いていきたいと思っています。

最後に、BDPのスタッフのみなさん、船戸先生、のりこさん、いっぱい迷惑かけた（かけられた？）memberのみんな、ありがとうございました。

いっぱいの愛を込めて。

久野 由里子



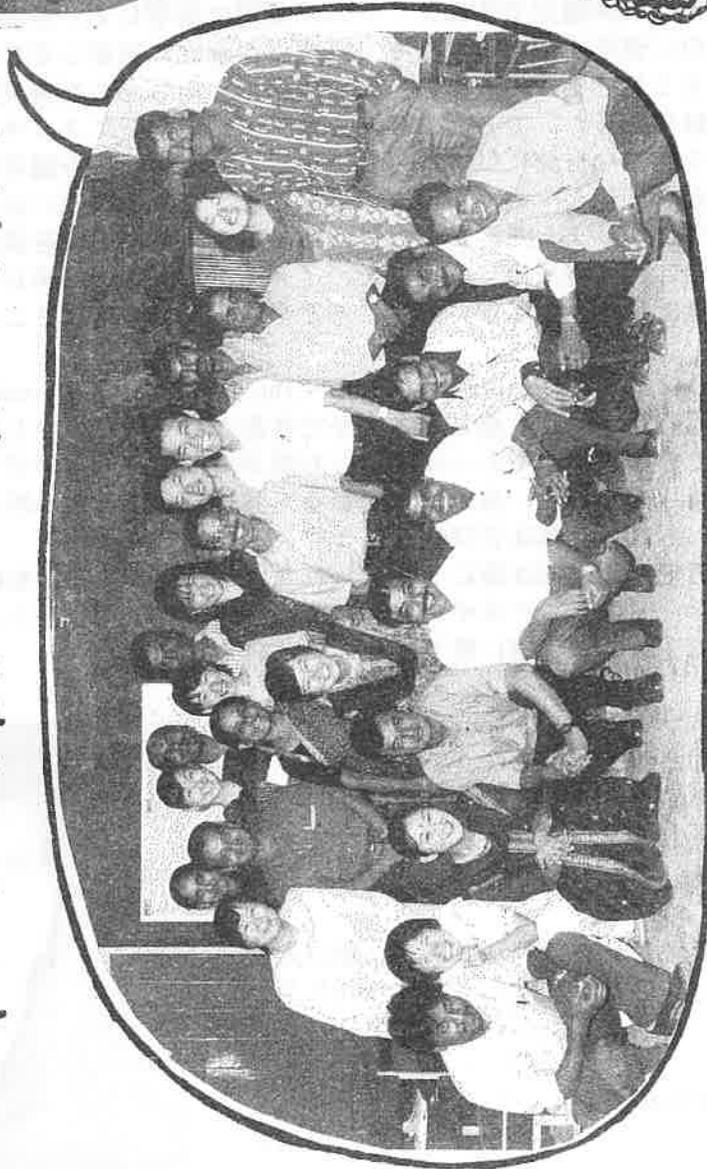
# ニスタ=フサトの<sup>Mr.</sup>先生

才18回ST総メンバーを食らうの図。

やっほ!!



▲ Yoshitaka, Funato (敬称略)



(上段、左から)

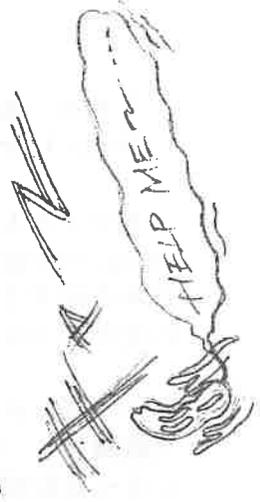
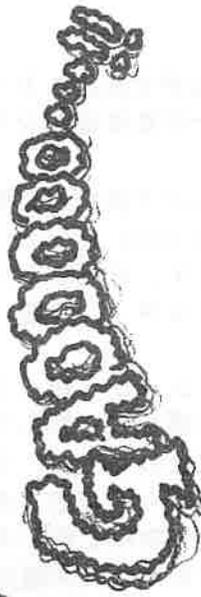
Mayako, Alam, Yoko, Lipika, Hisae, Ambrose, Kazuyo, Teshin, Reita,

Akiko, Ashim.

(下段、左から)

Hemanta, Yuriko, Megumi, Albert, Noriko, Faruk.

(敬称略)



# 第18回ACEFスタディーツアー参加者名簿(2000.3.3-17)

| 氏名     | フリガナ | 郵便番号     | 住所                   | 電話                      |
|--------|------|----------|----------------------|-------------------------|
| 矢澤 勲太  | ヤサヲ  | 181-0015 | 三鷹市大沢3-10-30東京神学大学寮  | 0422-32-4181 東京神学大3年    |
| 逢坂 容子  | オウサカ | 229-0014 | 相模原市若松4-17-20-306    | 042-740-0902 北里大看護学部3年  |
| 小磯 摩耶子 | コイソ  | 214-0036 | 川崎市多摩区南生田6-10-4      | 044-977-7009 公立学校手伝い    |
| 塩田 恵   | シホタ  | 181-0002 | 三鷹市牟礼4-3-1東京女子大椿寮    | 090-3449-5868 東京女子大英文2年 |
| 高橋 明子  | タカハシ | 168-0072 | 東京都杉並区高井戸東3-9-10-223 | 03-5346-0775 東京女子大コミカ2年 |
| 豊木 喜会  | トヨキ  | 274-0075 | 船橋市滝台町104-1-202      | 047-462-1897 会社員        |
| 朴 大信   | ハク   | 181-0015 | 三鷹市大沢3-10-30東神大構内5号  | 0422-31-1751 明治学院大社会3年  |
| 久野 由里子 | クノ   | 060-0001 | 札幌市中央区北一条西13-2       | 011-251-1434 札幌南高2年     |
| 船戸 良隆  | フナト  | 359-1132 | 所沢市松が丘1-20-2         | 0429-25-4685 ACEF事務局長   |
| 井上 備子  | イノウエ | 331-0042 | 大宮市奈良町97-46          | 048-668-2942 ACEF事務局    |

## 編集後記

4月に入ってから、作り始めたこの報告書。4月29日の総会を目標とする、かなりハリなスケジュールの中、みんなが分担して、みんなの報告書として作ることで、でき、協力してくれたみんなに感謝しつつ、私達のがんばりに自ら拍手。パチパチ……

明子

素敵なツアーの報告書作成に  
関わってとても幸運に思います。  
私達の思いが皆様の胸に伝わ  
りますよう……

恵

この報告書作りで今回のツアー  
について自分自身、整理をする  
良い機会を与えられました。こ  
の報告書からバンブーラジェの臭  
いを感じていただけたら幸いです。

容子

皆様によりよく伝わるよう努力致しましたが、不十分な点がございますことを御了承下さい。



<バングラデシュに寺子屋を贈ろう>

- ☆ ACEFの会員になりましょう
  - ・団体会員：年額1口 50,000円
  - ・個人会員：年額1口 5,000円
  - ・学生会員：年額1口 2,000円
  
- ☆ ACEFに献金しましょう
  - ・クリスマス献金（金額は自由です）
  - ・一時寄付金（年間いつでも結構です）
  
- ☆ アルミ缶回収と献金にご協力ください（年間いつでも結構です）

郵便振替 00100-0-185540

**アジアキリスト教教育基金**

〒169 東京都新宿区西早稲田2-3-18-26

☎ & FAX 03-3203-1925